

ガンダム・フレームアームズ・ガール

不動ユーゴ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ファクトリーアドバンスの手違いにより、一人の少女の元に辿り着いた一機のフレームアームズ・ガール。そのフレームアームズ・ガールの名は、バルバトス。

これは、たくさんの経験や出会い、そして戦いを通して、彼女達が成長していく物語。

目次

バルバトス起動	1
グシオンとフラウロス その1	6
グシオンとフラウロス その2	13
FAガールの日常	19
プラモデルを買いに その1	26
プラモデルを買いに その2	33
ともだち	40
姉（自称）がやってきた その1	45
姉（自称）がやってきた その2	52
アスタロト推参 その1	58
アスタロト推参 その2	64

バルバトス起動

「ただいま〜」

そこは、4月某日のあるアパートの一室。一人の少女が学校からの帰路に着いていた。少女の名は花谷ハナヤサツキ皐月。年齢は15で、今年の春に初めて上京してきて、そして一人暮らしも同時に始めた高校1年生だ。彼女の性格はというと、隠し事は苦手で根は明るい、ある意味で誰にでも嫌われることは無い、といった具合だろうか。

「はあ、学校のみんなとは結局今日もうまく喋れなかったし、どうしよう。本当にうまくやっていけるのかなあ？」

ただし、まだ都会の環境に慣れていないのか、高校に進学してから1週間が経過していたにも関わらず、新しい友人を作ることには至っていないかったのである。

「……もう、マイナスに考えちゃダメダメ。とりあえずお風呂にしよう」と

皐月は暗い方向へと向かっていた気持ちを切り替えようと、浴槽にお湯を入れて、制服のスカーフを外そうと首元に手をかける。

——ピンポン

しかし、インターホンが鳴り響いたことでその手は止まり、代わりに足を玄関の方に動かした。

「まったく、お風呂に入ろうとしてたのに。タイミングの良い人だな」
皮肉めいたことを口で言いつつも、皐月はドアを開け放つ。すると、そこに配達員の姿は——なかった。いったい何が起きたのか、わけがわからず、動きを止め同時に思考も停止させてしまうが、はたと何かに思い至った。

「あつ、東京だとドローンでの配達が普通なんだっけか。……アハハハ」

一人相撲だったことに虚しく笑いながらも、ポツンと地面に置いてあったダンボールを拾いあげて、部屋の中へとそそくさと戻っていった。

「えくとどれどれ、誰からだろう？」

まずはじめにいったい誰からの荷物か、宛先を確認しようとするが、何も書かれていない。

それならば、両親からの仕送りだろう。荷物の適度な重さからして、調味料かもしくは保存の効く乾物か何かだろうと予想を立てて、彼女は梱包をビリビリと破いていった。

ダンボールの中身を覗くと、そこには彼女予想とは異なるものが入っていた。キレイめに梱包された箱が入っており、その箱には『BARBATOS』という文字と共に、漫画やアニメに出てくるような二次元の女の子がプリントされている。

「……う？なんだろうこれ。えっと、バル、バト、ス……って読むのかな？」
首を傾げて箱に書かれたアルファベットを読みながら、今度はその箱のフタを開けた。中には、箱にプリントされたものと同じ特徴を持った約15センチメートル程度の大きさの模型と、組み立て式プラモデルのパーツ——ランナーが複数枚入っていた。そして女の子の模型はよくよく見ると、両目ともに閉じており、それは眠っているようにも見えなくはない。

「スゴイ。よくできた模型だなあ。それにこの子、なんだか可愛いし」
初めて見るその模型を持ち上げて、皐月はあちこちをまじまじ観察する。

「まさかこの荷物って、お兄ちゃんからかな。私の誕生日はまだ先だし、高校の入学祝いとかだったりして。けど、この子を部屋に飾るにしても……」

部屋には空いたスペースこそたくさんあるが、生活に最低限必要な家具家電以外の棚等のインテリアは無いのが今の実状だった。

——飾るのは今のところ諦めて、とりあえずのところ保管しておく。

そう考えて、模型を元あった箱の中へと入れようとしたその時だった。突然、模型の瞼が開き、目に輝きが灯る。そして、なんと驚くべくことに口を開いた。

「バルバトス、起動」

「わあっ！」

皐月は、模型が突然喋ったことに驚き思わず手放すしてしまうが、その模型は地面に到達するコンマ数秒の間に、空中で姿勢を制御してうまく着地させた。それから、突然落とされたことについて不満を抱いたのか、頬を膨らませて苦言を呈した。

「マスター、いきなり手を放すの、危ない。これからはしないこと。ダメ、これぜつたい」

「えっ、……ええっ!? あなたが喋ってる……んだよね?」

怒られたことよりも、模型が喋りだしたことについて、まだ理解が追いついていない様子の皐月。そんな皐月のことは一切無視して、模型の彼女は再び喋りだす。

「私、バルバトス。フレームアームズ・ガールのバルバトス。これからよろしく、マスター」

「……バルバトス、ね。うん、とりあえず名前はわかったけど、まずフレームアームズ・ガールって、何なの?」

彼女?の名前が『バルバトス』であることは理解したが、肝心なフレームアームズ・ガールについての説明をまだ聞いていない皐月は、苦笑いしながらバルバトスに訊ねる。

「私達、フレームアームズ・ガールは………、アーティフィシャルセルフ A S 搭載型ロボットの、戦ったり、遊んだり、マスターとたくさんのこと経験することで、新しいこと学習する機能、持ってる」

「なるほど。えくと、それはつまり人工知能みたいなものを持ってるロボットってことかな」

皐月は納得したようにポンと手を叩き、バルバトスに確認を求めるが、バルバトスは難しい顔をして首を傾げるのだった。

「……むい、人工知能と似てるけど少し違う。私にとって違い説明するの、とても難しい」

「そっか。それじゃしようがないか。……あ、あと他にも色々訊きたいことあるんだけど、とりあえず一つだけ質問するね。……そのマスターって呼び方なんかならないかな? なんだか堅苦しくて、なんだかむず痒いんだよね」

「……じゃあ、マスター以外、どう呼ぶ?」

フレームアームズ・ガールにとって、深く関わり合いを持つ人こそ主人であり、特に決まった呼び方がなければ、その主人のことをマスターと呼ぶようにプログラムされている。

「普通に名前で呼んでよ。私の名前は皐月っていうからさ」

とはいえ、あくまでそれは一つのプログラムであり、いわば初期設定のようなもの。ある程度の常識と知識を兼ね備えている彼女達にとって、主人の呼び方を変えることなど困難な話ではなかった。

「わかった、サツキ」

「うん、これでバツチリ」

特殊な呼び方を変えて、問題を一つ解決した皐月だったが、まだ他にも問題は山積みのままだ。

——要はこの子と一緒に生活しろってことなんだろうけど、具体的に私は他に何をすればいいんだろう？まあ、小さな妹ができたと考えればいつか。

今後についての見通しはまだ不透明で、不安なこともまだ拭えていないものの、今は考えないことにした。悪く言ってしまうえば彼女は、後回しにしたわけである。

そして呼び方の了解を得たバルバトスはというと、箱の中をゴソゴソと物色しており、大事だと思える話は終わった様子。皐月は、バルバトスの来訪によって中断していたことを改めて行動に移すことにした。

「じゃあ、私はお風呂入ってくるから、お話はそれからってことで」

「うい、わかった」

手を動かしながら返事をしたバルバトスのことに、好奇心旺盛な幼い子供の面影を重ねつつ、皐月は浴室の方へと足を運んでいくのだった。

「サツキ、装甲パーツ組み立てて欲しい」

お風呂上り、バルバトスに開口一番言われたのがそれだった。自分の身体よりも大きいランナーと取扱説明書を手にして迫ってきたのである。

さつきまで箱を漁っていた理由はそういうことだったのか、と先ほどの行動に納得する臯月だったが、あまり乗り気ではなかった。

「それって、今すぐじゃなきゃダメかな？」

「後回しはダメ。いますぐ作る」

「今すぐって言われてもなあ。そもそもプラモデル作るので、専用のニツパーが必要でしょ？その肝心なニツパーが無いんだよ」

乗り気ではない理由は、プラモデル作りにおける最も重要な工具、ニツパーがここに存在しないことにあつた。ニツパーが無くとも、ランナーからパーツを切り離すこと自体は可能であるが、そのようなことは論外。仕上がりが汚くなることはもちろんのこと、パーツ同士を合わせる際に切残しがあれば、組み立てることすらできなくなる。

それを聞き、バルバトスは諦めがついたようで、手にしていたものをいそいそと元あつた場所へ収納する。しかしながら、すぐに装甲ができなかつたことが残念だったのか、寂しい声でしょんぼりとしていた。

「むう。それでは、仕方がない」

「……すぐに作れなくてゴメンね。今日はもうお店閉まつてて無理だけど、明日ニツパー買ってくるから。それから作ろう？」

「わかつた。じゃあ明日作る、約束！」

ただ、明日臯月と一緒に作ろうと提案したそれだけで、バルバトスの声は再び元気になった。

こうして、一人の少女と一機のフレームアームズ・ガールによる、少し変わった新たな日常が始まるのだった。

グシオンとフラウロス その1

バルバトスが皐月の部屋に来た明るる日のこと。皐月はバルバトスに公言した通り、近所の家電量販店でニツパーを買ってきて、ついに装甲パーツを完成させた。作成の途中、組むパーツを危うく間違えそうになり、バルバトスにプンスカ怒られて指摘されることも数回あったが、無事に終わったのだ。

「よくし。作り終わった！」

「サツキ、頑張った。お疲れ様」

「えへへ、ありがと、バルバトス。それで、これを装備して誰と戦うの？」

「それは、私以外のフレイムアームズ・ガールとだ——」

——ピンポーン

「……ん、また宅配便かな。取ってくるよ」

会話の途中だったが、インターホンが鳴り、皐月は玄関の方へ向かう。外には、彼女の予想通りドローンによつて運ばれてきたダンボールの荷物が二つ、積み重なるようにして置かれていた。バルバトスがやって来たときと同様、宛名が書かれていなかったため、まさか？と思う皐月だったが、とりあえず二つのダンボールを持ち上げ、部屋の中へと運んで行った。

「中身は、なんだ？」

入って早々、バルバトスは興味津々で皐月に訊く。

「それは私にもわからないや。けど、とりあえず開けてみるよ」

ただ、皐月自身もその中身が（予想はついているが）はつきりとわからなかったため、開けようとしたその時だった。そのダンボールは皐月もバルバトスも手を触れていないにも関わらず、一人でに勝手に開いたのである。突然のことに皐月は呆然としていて、ダンボールの中からは小さい何かが出てきて、そして言葉を発し出した。

「はじめまして、私はグシオンです。本日はバルバトスと戦いに来ましたので、どうぞよろしくお願いします！」

「……フレイムアームズ・ガールが入ってるんじゃないかとは思って

たけど、まさか勝手に動き出すなんて。……って言うか私、バルバトスと戦うって、具体的にどうするとか、目的とかいまいちわかってないんだけどね」

「あっ！すみません、すっかり忘れてました。その説明がまだでしたね」

まだ、戦闘について理解していなかった皐月にグシオンは頭を下げてから、箱の中から手紙のようなものと鍋敷きに似た台座を取り出した。

「ゴホン、花谷皐月さん。まずはじめに、あなたの元に届いたバルバトスについてですが、ファクトリー・アドバンスの手違いで届いたようなもので、本来なら起動しないはずだったのです。何せ、ASの調整が不完全でしたので」

「えっ、そうだったの!?!」

「はい、そうなのです。ですが、あなたは偶然にも起動できてしまった。そこで、その特殊なフレームアームズ・ガールの一機——バルバトスと、起動させた人物——つまり皐月さんにファクトリー・アドバンスは目を付けて、様々なデータを収集しよう。といった目的で私達がここに来たわけです!」

「ふ、ふむふむ」

皐月は今の話、半分はなんとか理解したが、他の半分はさっぱりとといった様子である。

「あと、戦闘についてなのですが、私が今持っている、このセッションベースを使ってバトルを行い、その時に得たデータを収集します。そして、収集したデータで学習し成長したASを製品としてのフレームアームズ・ガールに搭載させます」

「それってつまり、サンプルを取る、みたいなこと?」

「はい、簡単に言ってしまうばそうなります。そして、そういった内容についてのもっと詳しい情報がこの書類に書かれていますので、渡しておきますね」

「あ、ありがとう」

あどけないバルバトスとは違い、しっかりした子だなあ。と思う皐

月。

「では、バルバトス！早速ですが、バトルをしましょう！」

臯月への説明をすっかり済ませたグシオンは、急いでいるのか、はたまたこれが平常運転なのか、バルバトスへ戦いを申し込んだ。しかし、当のバルバトスはというと、グシオンのことを見向きもせずにあさつての方向を向いていた。

「グシオン、あつちは開けなくていいのか？」

「えっ？」

バルバトスの言うあつちとは、グシオンと共に来た未だに開かれていないダンボールのこと。同じタイミングで来たというのなら、もう一つの方もファクトリー・アドバンスからの荷物であると考えるのが自然。バルバトスでもそれは容易に想像がつくことだ。

「ああ、フラウロスのことは別に無視して構いません。時間が経てば多分勝手に起きてきますから」

「どうやら、箱の中にいるもう一機の名前はフラウロスというらしいが、どうも起きてこないようだ。」

「そうか。じゃあグシオンとバトル、する」

そしてバルバトスはというと、箱の中身がいったい何なのかがわかって自分の中で納得したのか、グシオンとのバトルをあつさり引き受けた。グシオンはその返答を聞き、セッションベースを二枚、向い合せるように合体させて、一方のセッションベース上に乗る。

「サツキ。アーマー装着、お願い」

バルバトスも空いているもう片方のセッションベースに乗って、臯月にアーマーを取り付けるよう依頼をする。

「アーマー装着……って、どうするの？」

「アプリ、使う」

「……専用アプリは先程お渡しした書類の中にあるQRコードを読み取ってください。そうすれば、すぐにインストールされるはずですよ………お、これかな。うん、あつたよ」

初めてするバトルのため、当然その方法を知らない臯月はバルバトスに聞き返す。すると、言葉が足りないバルバトスを補足する形でグ

シオンからも答えが返ってきた。

インストールが終わると、皐月はアプリをすぐに立ち上げて画面上で操作を始める。

「このアーマーが、胴体で……腰、脚、腕を着けて……。あとは武器を背中に、つと。これでよし！」

アプリ上でのアーマーの設定が終わわり、戦う準備がついに整った。すると、セッションベースが光を放ち始め、それはまるで柱のように上へ上へと昇っていく。

「準備ができたようですよ、始めますよ」

「うい」

「グシオン」

「バルバトス」

「フレームアームズ・ガール、セッション！」

「行きますー！」

「行くよ」

二人はそれぞれの掛け声と共にセッションベースから姿を消すと、次々にアーマーが装着されていき、光が伸びている先に広がるヴァーチャル空間へと転送された。今回選ばれたエリアは、障害物が片手で数えるほどしか見当たらない広大な砂漠フィールド。

「さてと、手加減は一切しませんから、覚悟してくださいね！」

グシオンは薄い茶色を基調にした装甲で全身を覆いつくしており、かなり太めのシルエット、重量感がある。背面上部には小さめの翼のようなユニット、下部にはライフルが2丁とヘルバードが1本マウントされている。

彼女は手始めにヘルバードを取り出して、バルバトスへと接近を開始した。

「望む、ところー！」

対するバルバトスは、白っぽい色合いの装甲に青や赤、黄が所々にアクセントとして見られ、太めのグシオンに比べると大分細身な印象。装備しているものは、自分の身長ほどある長さの滑腔砲とそれと同様の長さのメイスがそれぞれ一本ずつ。それらを後ろに背負って

いる。

グシオンが接近しているのを確認したバルバトスは、滑腔砲をすぐさま構え迎撃を行う。

バルバトスが撃つ滑腔砲の弾丸は、連射こそできないもののグシオンのことを捉え、ライフゲージを確実に減らしていく。

「この程度で私は止まりせんよー！」

しかし、さすがは重装甲のグシオン。防御性能は伊達ではなく、ライフゲージの減りが思っていたよりも悪い。

さらに、そうこうしている内にグシオンとバルバトスの距離は無くなり、グシオンのハルバードが届きそうな位置にまで近付かれていた。

「そこですー！」

ハルバードを頭の上から思いきり振り下ろすグシオン。バルバトスは滑腔砲を背中に戻しながらメイスに持ち換えると、向かってくるハルバードの進行方向へ強引に持っていき受け止めた。

「……むいー！」

「クツ、なかなかのパワーですね。けど、まだまだ！」

そして、そのままグシオンのことを力任せに押し返してみせた。

「おお、スゴイ！すごい迫力だね！」

二人のバトルを観戦している皐月はというと、想像以上に激しいバトルを見せつけられて、やや興奮気味に歓声をあげる。

「このままいけば、バルバトス、もしかしてグシオンに勝てるかも？」

戦況がバルバトス有利に進行しているため、初バトルで初勝利となるかも、といった期待感を皐月は募らせていくが、不意に横から声をかけられた。

「——そいつはどうだろうな。グシオンの奴、出し惜しみしてやがるから勝負がこの先どっちに転ぶか、まだわからないぜ」

「へー、そうなの……って、あなたは誰?！」

突然の声、かっいままでいかなかったはずの隣に知らない顔のフレームアームズ・ガールが、二人のバトルをさも当然のように観戦していたため、皐月は酷く狼狽する。すると、そのフレームアームズ・ガール

ルは、皐月の顔を向いて明るくニカツと笑い、それから名乗った。「おつといけねえ。さつきまで寝てたから紹介がまだだったな。俺はフラウロス。グシオンと同様、俺もバルバトスとバトリに来た!」

「ああ、なるほど。グシオンがさつき言ってたフラウロスって、あなたのことね」

「あ?なんだよ。アイツ、俺のことも勝手に言いやがったのか。まあ、文句は後で言つてやるとして……さつき言つたことなんだけどな、グシオンはまだ本気じゃねえ」

皐月とフラウロスが話をしている内にも、バルバトスとグシオンのバトルはどんどん展開していく。バルバトスは突き放したグシオンへ再度接近して、メイスで何度も叩きつけようとする、負けじとグシオンはハルバードで凌いでいた。

「えっ?けどさつき手加減しない、とかグシオン言つてたと思うんだけど」

しかし、グシオンの守りよりもバルバトスの攻めが上回っているようで、ガンガン押し込んでいく。そして、バルバトスは、ハルバードをグシオンの手元から叩き落として、ついに追い詰めた形となる。そのままメイスを振りかぶると、グシオンのがら空きとなっている脳天目掛けて振り下ろした。

金属同士がぶつかる凄まじい音が、耳に突き刺さるようにフィールド全体へ響き渡り、衝撃によって砂漠上の砂が舞う。

「まあ、そりゃあもちろん。アイツは、間違いなく加減はしてないだろうよ。けど、俺が言ってるのはつまり——ああいうことだ」

砂煙が晴れると、2体のフレームアームズ・ガールは両者共未だに健在だった。勝負が決したかに見えたバルバトスの一撃だったが、なんとグシオンによって防がれていたのである。——背中 of 翼状ユニットから伸びた3本目と4本目の腕とナックルガードを装着した拳で挟むようにして。

「……ッ!?!」

「腕が4本!?!嘘!?!」

まさかそのような形で躲されるとは思ってもみなかつたのか、バル

バトス（と臯月）は驚愕の表情を浮かべる。グシオンはバルバトスのその様子を真正面で確認すると、不敵に笑んでみせた。

「フフ、驚いてくれたようで何よりです。私、絶対に負けませんから！」

グシオンの言うようにバトルはまだ始まったばかり。終盤戦にすら差し掛かっていなかったのだ。

バルバトスの残りライフゲージ——12000 / 14000
グシオンの残りライフゲージ——7500 / 14000

グシオンとフラウロス その2

グシオンはサブアームでメイスを受け止めた密着状態のまま、通常の腕で後ろのライフル2丁を取り、そのまま至近距離でトリガーを引こうとする。

バルバトスは慌ててメイスを振り回しながら盾にしつつ全速で離脱しようと試みるが、その2人の距離はあまりにも近過ぎた。決定的な致命打こそ避けたもののグシオンの銃撃をもろに受け、バルバトスのライフゲージは大きく減少していく。

「……ウウウツ！」

「そう簡単には逃がしません！」

弾を弾きつつ後退するバルバトスに追撃を仕掛けるグシオン。つい先程とは立場がまるつきり逆転していた。

「アイツ、見たまんまのパワータイプなんだが案外器用なんだよなあ。ああなっちまうと近距離では、あの4本腕で攻防両方が同時にできる。遠距離においても今のバルバトスよりかは手数が間違いなく多いし、命中精度も補助スコープを持つてるおかげでかなり高い。おまけに装甲が分厚くて堅い」

「ええ〜！それってバルバトスが勝っているところが無いってこと？ 八方塞がりじゃない」

「突破する手段は限られてくるから、こうなった以上、バルバトスが勝つのはかなり厳しいだろうな。けどまあ、スピードに関して言えばバルバトスの方が間違いなく勝ってるわけだから、まだ詰んではないだろ」

フラウロスが臆月に解説している間に、バルバトスのライフゲージがついに半分を切る。バルバトスは自分に内蔵されたデータの中からこの状況の打開策を検索するが、戦闘経験が皆無のため、データもほとんど少ない。故に最適解を見つけだすことなどできなかつた。最小限のダメージで抑えつつしばらく逃げてみると、建物の残骸を発見。とりあえずその物陰にバルバトスは隠れた。

「このフィールドで障害物を見つけるとは、なかなか運が良いようだ

すね」

グシオンもバルバトスが障害物に身を隠したことで、一旦ライフルによる攻撃を止め、進行していた足も止める。バルバトスは動こうにも動くことができず、グシオンは無理に動く必要が無いため動かない。一種の膠着状態となっていた。

「あく、俺だったら超遠距離から『ギャラクシーキャノン』をぶっ放すんだが、いや待てよ？接近戦での1発は多分バルバトスの方が上だろうから、俺とは逆に零距离まで近づけばいけるか……」

「それってつまり、バルバトスが勝つにはもう一回グシオンに近付かないといけないってこと？」

「まあそうだな。一番可能性のある手段がそれってことだ」

「ふーん、そっか」

フラウロスからヒントを貰うと、しばらく黙り込んで考えだす。それから何か良い案を考え付いたのか、皐月はスマホにむかってバルバトスへ話しかけた。

「ねえバルバトス。とりあえずさ、もう一回グシオンに接近しよう。近くでなら勝てる可能性があるみたい！」

「もう一回？けど、ライフが少なくなってるから動くのとても困難。それと、グシオンのライフル、邪魔」

「……それじゃあ、砂に潜って隠れながら近づいてみる、とか？あ、それと次にメイス使う時は叩くより突いた方がいいかも」

「砂、潜る、突き………サツキ、わかった！」

皐月のアドバイスとも思えない突拍子の無い提案を受けると、バルバトスはそれを理解したのか否か、隠れていた物陰から飛び出し滑腔砲をグシオンに向け、引き金を引く。と同時に脚部のブースターを全開に吹かした。放った弾丸はグシオンの足元に落ちると、爆風と共に周囲の砂も巻き上げる。つまりフィールドの砂を利用することでグシオンの視界を一時的に遮断したわけである。

「なるほど、フィールドの特色を活かした煙幕ということですか。なら、上からだったらどうでしょう」

それでもなお、グシオンは落ち着いていた。陸地で撃つことができ

ないと判断すると、そのまま上空に飛び上がって空中で照準を定めたのだ。さすがに天高くまで砂が昇っていくことはないため、視界は良好。この攻撃が外れるとは思えない。

「むい………だったらー」

ところが、ここでバルバトスは普通では考えられない行動に出る。グシオンが向かってくるバルバトスに狙いを定めて撃つてくるが、バルバトスは滑腔砲で撃つて反撃をする………のではなく、なんと滑腔砲本体を投げ飛ばしたのである。

「……クツ、これでは照準が！」

回転しながら真っ直ぐ向かってくる滑腔砲をグシオンはやむを得ずライフルで迎撃、そのまま爆散させる。

「随分と荒っぽい真似をしますね！」

「——けど、これでグシオンに近付けた」

「……ッ！」

滑腔砲を囷としている間にバルバトスも飛び上がり、さらにはグシオンよりも高い位置まで昇っていた。ライフルを騙し騙しでなんとか掻い潜り、ライフゲージも極力減らさないようにして近付くことに成功した。あとはどうにかして相手のライフを自分のが尽きるよりも先に減らし切るだけ。

グシオンは距離的にもうライフルは使い物にならないと判断し、後ろに戻して代わりにナツクルガードを4つ、それぞれの拳に素早く装着する。バルバトスは制空権がこちらにあることを生かし、重力に身を任せながらグシオン目掛けて落下、メイスの先端を下に向ける。

勢いそのままにメイスを突き立てようとするバルバトスに、グシオンもやられまいと必死に抵抗をする。そして、グシオンの上にバルバトスが乗るような形で地面に落ちていく。

それでも、バルバトスの重いメイスはグシオンの身体に到達することなく、そのスレスレで止められていた。

グシオンは決着をつけるために、サブアームでメイスを止めつつ、腕をバルバトスに突き出そうと体を動かす。グレネードを撃ち込むためだ。これは勝てる確信し、勝利宣言をしようとしたグシオンで

あつたが、

「これで——「とどめ」——えっ?」

バルバトスの不穏な言葉と共にそれは遮られる。グシオンが武装を隠していたようにバルバトスもまた温存している何かがあつたのだ。ただ、それはグシオンのようにあえて隠し、切り札として取つておいたわけではなく、皐月に言われるまですつかり忘れていたもの。——それはメイスに仕込んであるパイルバンカーだった。バルバトスがメイスの柄の部分を手で捻ると、到達寸前のところで止まっていたメイスの先端から、炸裂するかの如くニードルが飛び出した。

「……………ツツ!!」

息が詰まるであろうほどの強烈なインパクトをグシオンの腹部に与えると同時に、凄まじい加速度を加えて地面へ突き落とした。地面に叩きつけられたグシオンは目を回しながら気絶。半分近く残っていたライフゲージもゼロとなった。

「……………きゆう」

『Winner、バルバトス』

2人のバトルが終わり勝利者がアナウンスされると、ヴァーチャル空間から元いたセツシヨンベースの上に戻された。

「勝つてよかつたね!バルバトス」

「私が勝つたの、サツキのおかげ。ありがとう」

勝つたバルバトスに皐月が賞賛の言葉を送ると、控え目な笑顔を作りながらバルバトスは感謝の言葉を返した。

「はあ。私の負けですか」

「おう、お疲れさん。負けて残念だったと思うが、かなり良い試合だったぜ」

「……………あらフラウロス。あなた起きてたんですか」

「なんだよ、慰めてやったつてのに。その言い草は無いんじゃないかねえのか?」

「いつも言葉使いが雑なあなたに言われたくありません。それに、今回は負けましたが、次は使用する武器を変更して挑戦です。やはり負けっぱなしは悔しいですから!」

「……相変わらずの負けず嫌いっぷり、いつも通りだなお前は」

フラウロスはバトルで負けたグシオンに慰めの声をかけるが、負けたことに関して大して落ち込んでいない様子だった。それを確認した臯月はグシオンに訊ねる。

「ところでグシオン。バルバトスのデータ収集ってこれで終わりなのかな？」

「いえ、データ収集はまだ始まったばかりです。たとえば、私とフラウロス以外のF Aガールも訪問してくるかもしれません。もし来なくとも、様々な地形、使用する武装、そして変則的な集団戦といったように変えようと思えば、いくらだって戦闘の条件は変えられますから、集められるデータは無限と言っても過言じゃありません」

無限という途方もない言葉を聞き、臯月は思わずげんなりするが、グシオンはさらに続ける。

「しかし、これにはメリットもあります。バトルを行えば行った分だけ、フアクトリー・アドバンスから謝礼金が出るんですよ。それも高校生のバイト代とほぼ同じくらいの額は貰えます」

「え、そうなの!？」

「はい、ですからどんどんバトルをしちゃいましょう!」

実質自分は何もせずにお金が貰える。そのような話を聞けば誰だってやる気になるのは当然のことである。臯月は早速バルバトスへ話しかけてみた。

「ねえ、バルバトス。今日はお休みだしさ、まだバトルする？」

「……zzz」

「……って、あれ。いつの間にか寝ちゃったの？」

……が、バルバトスはいつの間にか充電くんの上で気持ちよさそうに眠りについていて。戦う本人が寝てしまっただけは元も子もない。「クスツ、バトルの時も思いましたが、面白い子ですね。バルバトスは」

「ああ、そうだな。俺もしばらくバトってなかったし、早く戦ってみたところだ!」

こうして、バルバトスは起動してからの初戦を勝利で飾ることがで

きたのだった。

FAガールの日常

「ところで皐月さんはいままでずっと一人暮らしだったのですか？」

グシオンとフラウロスが皐月の住む部屋へやってきて数日が経過したある朝のこと。不意にグシオンは、食事をしている途中の皐月へ質問を投げかけた。

「……えくと、私のこと何歳だと思ってる？さすがに何年間もずっとのわけないってば」

「……あ、すみません。言われてみればそうですね」

「別に謝らなくてもいいけど。一人暮らしは今年の4月に入ってからだから、一月も経ってないや。でも、そんなこと急に聞いてどうしたの？」

「いえ、なんとなく気になっただけです。ただ、よくよく考えてみると、親元からあえて離れ、一人で炊事から掃除、洗濯まで何でもこなす皐月さんは立派だなあと思ひまして」

「もう、褒めても何も出ないよ、グシオン。それに、なんか成り行きで一人暮らしが始まったようなものだし」

——成り行きで始まった。皐月の何やら事情があるような、能動的でない受動的な言い方にグシオンは引つ掛かるものを感じた。

「へえ、そう、なんですすね。……あ、今日の天気予報は終日晴れのようにですが、にわか雨が降るかもしれないので、折りたたみ傘を持って行った方が良さそうです」

すると、グシオンはその事情を深読みしたのか、これ以上は詮索すべきでないと考え、この話題を終わらせようと別の話題へ切り替えようと話を逸らしたが、皐月はそれに感付いた。

「あ、気を使わせてごめんね。親は二人とも元気だし、別に気まずい話でもなんでもないからさ」

「そ、そうだったのですか！それもそうですよね、なんか私深読みし過ぎたみたいで、なんかすみません。……しかしそれでしたら、わざわざなぜ？」

「……えくとね、話せば結構複雑なんだけど——」

皐月は頬を指で搔く仕草をしながら説明を始めていくが、彼女が言うように言葉にするのは難しいものだった。要点のみを噛み砕いて説明すると、

①元々父親の転勤により、家族3人でここへ引越す予定だった。
②そのため、皐月は引越先から近くの高校へ入学を決めた。
③しかし、転勤先が決定していた所から急遽変更となり、父親はそちらへ行くことに。

「——とまあ、こんなことになって、お母さんは私のところかお父さんのところ、どつちに行くか悩んでただけど、「私が一人でも大丈夫。なんとかなるから」って自信満々に言ったら、お父さんと一緒の所に行くことを決めて、今の私は一人暮らし。っていうわけ。今の説明でわかったかな？」

長かった説明を終えると、テーブルの上にはグシオンだけでなく、まだ寝ていたはずのフラウロスや、二人の会話そっちのけでメイスの素振りを黙々と行っていたはずのバルバトスまでもが、皐月の話を聞き入っていた。

「ん、よくわかんなかったが、要は色々大変だったってことだな！」

「……うん、難しくてわからない」

もつとも、グシオン以外の二人は頭で処理しきれていないようだったが。

「まあ、わからなくて当然だと思うし、しょうがないよ。これで私の話はおしまいだから……って、もうこんな時間！皿洗いは帰ってきてからするしかないかな」

時間のことを気にも留めず、話すことに集中していたため皐月は皿洗いのことをすっかり忘れていた。今からしたら学校へ遅刻してしまうため仕方なく断念し、洗面所へ足早に直行。手早く身支度を済ませると、前日に準備していた手提げバッグを持って玄関へと向かう。

「それじゃあ、学校に行ってくるから、留守番よろしくね」

「いってらっしゃい、サツキ」

「はい、お気をつけて」

「いつてら〜」

皐月は3人に向けて挨拶を言い残して、部屋を出て行く。留守番を頼まれた3人のFAガールもそれぞれに言葉を返して皐月を見送った。

FAガールがすることは基本的にその個体の自由だ。決められたプログラムも特に無い上、知能もあり思考することができるからである。

「さ〜て、これから暇なわけだが、どうすつかな」

「そうですね、とりあえず私は……先日戦いましたし、武器のメンテナンスでもしましょうか」

「私は、さつき続きの続き、する」

「……お前らまじめかよ。まあ別にいいけど。じゃあ俺はもう一眠りするわ」

皐月が出てから間もなくして、バルバトスは先程中断したメイス（と太刀）の素振りを再開し、グシオンは戦闘で使用したライフルやサブアーム等の整備を行い、フラウロスは再び充電くんの上へと戻って眠ってしまった。

「もう少しだけ離れて……そう！そこで止まって欲しい」

それから1時間ほど経過すると行動にも変化が現れ、バルバトスは飽きてしまったのか今度は、充電くんに的を持たせて滑腔砲による射撃練習を始めだした。

「ふう、やはり大変ですね。もっと整備のしやすいものを開発して欲しいものです」

「……zzzz」

しかし、グシオンとフラウロスには特に行動の変化は無かった。

「むい、飽きた。……ふあ」

そしてさらに時間が経過して正午を過ぎると、バルバトスはついに

することやることがなくなってしまうたのか、欠伸をする仕草がちらほらと見え始めてくる。

「なんか面白い番組やってねえかなあ……つと」

「あ、ちょうどヒ○ナンデスがやってる時間ですね。地上波の4チャンネルをかけてください」

「ほいほい、りよーかい」

武器の整備を終えたグシオンと本格的に目を覚ましたフラウロスの両名はというと、テーブルの上にあたりリモコンを操作して、テレビの電源を付け、見始めた。バルバトスは二人の行動に興味を湧いたように二人に訊く。

「グシオン、フラウロス、それはおもしろいのか？」

「ええ、人気のバラエティ番組ですし、私は面白いと思いますけど。観たいなら一緒にどうですか？」

「そうそう、百聞は一見に如かずだ。バルバトスもこっちに來てみなって」

「わかった、じゃあそうする」

退屈を持て余していたバルバトスは、グシオンとフラウロスに勧められるがままに、迷うことなくテレビの前へと移動していき、しばらくの間眺め続けた。しかし、この段階のバルバトスにとってはよくわからない人間達が出ている番組だったため、面白いと感ずることができないまま、時間だけが過ぎていった。

そこからまた時間が進み、3人が見ていたテレビ番組も終わりの時刻となる。

「うーん、終わった終わった。……また寝るか」

「……他にすべきことは無いのですか、あなたは」

「フラウロス、寝過ぎ」

またしても寝ようとするフラウロスに対し、他の二人から突き刺さる勢いの鋭いツツコミと共にジトツとした視線が向けられる。総ツツコミを受けたフラウロスは声をやや大きくして反論した。

「しよ、しよがないだろ！本当にすることが何にも思いつかねえんだから！」

「まあたしかに、言われてみればそうですね。一日だけでもいいから自由にして良い日が欲しいと、ラボの中では考えていましたが、いぎそうなると結構戸惑いますし」

「だろ？……けどま、ラボにいるよりかは、ここの方が居心地がずっと良いよな」

「ええ、それには同意します」

皐月の部屋に来る以前の話で盛り上がるグシオンとフラウロス。バルバトスにとつてはその話もまた聞き慣れない言葉であり、新鮮な話題だったため二人にまた訊ねた。

「らぼ？にいた時は、ふたり何してたんだ？」

「え〜とですね、シミュレーターを使った模擬戦と新しい武器の運用試験をただひたすら繰り返し返す毎日。そして、定期的に行われるメンテナンス。あとお休みは1週間の内に3日ありましたが、外に出ることはできなかつたので、することと言えば、他の子と会って喋るぐらいでした。……今思えば、あまり面白い日々とは呼べませんね」

「そうそう。それに引き換え、正真正銘のFAガール同士のバトルはごくたまにしかなかったからな。まあつまらなかつた」

「ですから、あなたはある意味で幸運だったのかもしれない。プロトタイプ試作機でありながら、正式なマスターがいる。そのようなことは本来絶対にあり得ませんから。まあ、そのおかげで私達もラボの外に出ることができたので、その点はラッキーでしたね」

「……そうか。私は幸運、だったのか」

見たことのある世界がこの部屋しか無いバルバトスにとって、あまり実感が湧かない話であったが、二人がもと居た場所よりは良い環境であるらしい。ということがいままでの話を聞いてわかったことだった。

これで話すことは大方無くなったわけだが、まだできることはまだ残っていた。

「そういえば皐月さん、今朝私達に構ってしまったせいで皿洗いでき

なかつたんですよ。よし！私達でしましょうか」

それは今日の朝、皐月がやり損なつた皿洗いである。このような考えに至つたわけは、朝の時間を少なからず奪つてしまったという責任をグシオンが僅かながら感じていたためだ。

「ええ、俺達にも手伝えつてのによ？」

「どうせ、寝ることしか無いようですよ、問題ありませんよね？」

「問題はねえけど、今朝のあれは、悪いの完全にグシオンだけなんだから、俺とバルバトスはやる必要ないだろ。それに濡れるし」

「もう。私達、防水機能備わつてるんですよ。それぐらい別にいいじゃないですか」

しかし、そのグシオンの親切心とは裏腹に、皐月の手伝いの一環としての皿洗いにあまり乗り気ではないフラウロス。

「それは、サツキの役に立てるか？」

「はい、それはもちろん。それに皐月さんのことです、褒めてくれるかもしれないですよ」

「そうか。じゃあするぞ。グシオン」

そのフラウロスとは対極的にやる気を見せるバルバトス。

「フラウロスは、本当にしないのか？」

「何度も言わせんなって。俺にはする必要が見つかんねえし、それに、お前だつて無理にやらなくともいいんだぞ？」

「私は、サツキの役に立ちたいと思つたが。ざんねんだ」

バルバトスに言われてもまったく動こうとはせず、正しく「ここで動かない」を体現していた。

「まあ乗り気でないというのなら仕方ありませんね。では、二人でやつてしましましょうかバルバトス」

しかし、不動のフラウロスをやる気にさせる……もとい、脅すネタは付き合ひの長いグシオンが多く持つていた。

「——グレル前のまだおとなしかつた頃のフラウロスの昔話でもしながら」

「……フラウロスが、おとなしかつた？」

「——ツ!?おい、それは俺を脅してんのか?!」

グシオンの言葉にバルバトスがいままで見せたことも無かった驚いた表情を見せれば、フラウロスはゴロゴロしていたところから飛び起きて慌てふためいた。

「え、いったいなんのことでしょう？き、バルバトス、手伝おうとしないフラウロスのことなんか無視して早く行きましようか」「うい」

表面ではいつものように微笑んでいるグシオンだが、その内面では敵役にピッタリな高笑いでもしているのだろうとフラウロスは思い、しようがなく折れた。

「ダーツ！わかったよ！俺も手伝ってやるよ！だから三人でとっとと終わらせるぞ！」

「え、本当ですか？ありがとうございます、フラウロス」

「コ、コイツ……ッ！」

悪魔め。と内心で呟き、不満を抱えながらも、宣言通りに手早く済ませたのだった。そして、結局のところフラウロスの過去黒歴史がバルバトスに露顕してしまうという事態は未遂に終わった。

「ただいま」

「おかえりなさい、サツキ」

「今日もお疲れ様でした」

「おかえり、ごくろうさん」

時間は16時を回り、皐月が帰ってくる。部活や同好会、クラブに所属しておらず、バイトもしていないため、平均的な高校生よりも帰る時間が早いのだ。

「皿洗い、私達がやっておいた」

「え！ほんとに？」

「はい、数もそこまで多くありませんでしたから」

「それに朝遅くなった一番の原因はグシオンにあるんだしな」

「でもありがとね、みんな！」

こうして彼女達の一日は今日も平和に過ぎていくのだった。

プラモデルを買いに その1

「ああ、どうしようかなあ……」

休日の朝早い時間帯に、皐月は憂鬱そうな声で嘆きテーブルの上になだれていた。バルバトスは起床してすぐに皐月の変わった様子にいち早く気が付き、すかさず声をかける。

「どうした、サツキ。朝から元気ないぞ?」

「ああ、おはようバルバトス。実はね……バルバトスの武器(プラモデル)を買おうと思ったんだけど、種類が多いし値段も様々だしでね、どれを買ったら良いか悩んでるんだ」

実は彼女、バルバトスの装甲を組み立てた際に、プラモデル作りが楽しいと感じたようで、新しく買って作ろうと考えついたらしい。……ただ、考えたままでは良かったのだが、ネットを使って実際に検索してみると、想定以上に種類が幅広く、どれを買ったらよいかと悩んでしまったわけなのだ。

「なるほど、そういうことだったか。じゃあ、私がサツキについていく。それで、一緒に武器選ぶ」

「……そっか、その手があったじゃない!」

使用する本人に選ばせる。手取り早く済む上に後悔することの無いという、一番良い手段がすっかり抜け落ちていたようで、皐月の顔は明るさを取り戻していく。

「——ちよつと待った!」

「えっ何?フラウロス。つてか、今日起きるのやけに早いね」

「そんなことは別にいいだろ?それよりもさっきの話、俺も一緒に行くってのはどうだ?経験豊富な俺と一緒に行って、バルバトスと相性が良さそうなものを適当に見繕ってやつからよ!な?いいだろ、皐月」

「ん、そうだなあ……」

二人を模型店へ連れて行くことを、目を瞑りながら想像する皐月。それから10秒も経たないうちに想像がついたのか、目を開けると手でバツを作ったと言った。

「ダメ、連れて行くのは、先に言ったバルバトスだけとします」

「なぜだサツキ？別に問題、無いはず」

「そうだそう。別に一人も二人も変わらないだろ？」

「プラモデルの種類については、バルバトスが気に入るものなら相性良い悪いは特に私気にしないからいいの。……だけど、二人一緒にいたら、なんかうるさくなりそうで、周りになんか不審がられそうだし」
うるさくなりそうと言われ、バルバトスはどうかということだと言わんばかりに首を傾げている一方、フラウロスは心当たりがあるかのよう
に、目をゆつくりと逸らしていった。

「……ま、まあバルバトスのマスターである皐月がそう言うんなら仕方がない。……けど買いに行く前に、何が物足りないかをバトルをして確認してみるのはどうだ、バルバトス、皐月」

「うくん、たしかにそうだね。そういえばバトルをしたのはグシオンとだけだったし、買いに行く直前にするのも悪くないかも。バルバトス、どうする？」

「わかった、そうしよう。けど、勝つのは、私だ」

「へっ、なかなか言うじゃねえかバルバトス。まあいいさ、やると決まれば速攻で始めるか！」

バルバトスはフラウロスの提案に即決で返事をする、フラウロスと共にすぐさま準備に入った。

「ふああ……。おはようございます。皐月さん」

そのようにドタバタと二人のF Aガールが活発に動いていると、もう一人のF Aガールがまだ眠そうに欠伸をしながら起きてきた。

「ん、おはよう。グシオン。今日はいつもよりもお寝坊さんだね」

「私だってお休みの日ぐらいは、もうちよっと寝てたい気持ちになりますよ。……にしても、いくらお休みの日とはいえ、フラウロスが私よりも早く起きるなんて、今日は雨でも降るのでしょうか？」

「……アハハ、私的には降って欲しくないんだけど」

「クスツ、ちよつとした冗談ですよ、冗談」

「——サツキ、準備完了、した」

「なあ、早いとこ始めようぜ」

臯月とグシオンが関係の無いちよつとした話をしている内に、もう既に二人はセッションベースの上でスタンバイしている。バトルの準備はできるところまでではできたようだ。

「うん、早速しよつか！」

臯月はスマホ上でアプリを起動させて、前回と同様にバルバトスの装備を確認した。準備はこれですべて整った。

「フラウロス」

「バルバトス」

「フレームアームズ・ガール、セッション！」

「いっくぜえー！」

「いくよ」

前回のバトルと同様に、二人はセッションベース上からヴァーチャル空間へと転移。バルバトス対フラウロスの戦闘がついに始まった。

今回のフィールドは、高層ビルが多く立ち並ぶ街のど真ん中。前回のバトルとは打って変わり、障害物が豊富に存在している。

フラウロスは派手なピンク色の装甲で身を覆っていて、バルバトスとほぼ同じくらいか、むしろそれよりも軽いかと推測されるほどの軽量感。武器は腰にぶら提げているマシンガン2丁、肩アーマーの両サイドにそれぞれ取付けられたアサルトナイフ、そして何よりも特徴的なのが両肩に担がれた2門のキャノン砲だ。

対するバルバトスは、前回と同じ武装に加えて、左腕にガントレット状のワイヤークロー。それと最初から太刀を持った状態で出撃していた。

「よし、このフィールドならいけそうだ！」

フラウロスはこの地形とは相性が良いのか、もしくは戦い慣れして得意なのか、開始早々に飛び上がるとバルバトスの前から姿を消す。

「む、逃がすか！」

バルバトスもすぐにフラウロスの後ろを追いかけて、積極的に仕掛けていこうとするが、障害物が多いことよって見失ってしまった。

「……どっか、いった？」

キョロキョロと辺りを念入りに探すバルバトスだが、レーダーが指

し示しているフラウロスのいる位置はもう既に遙か遠い。

「むう、かなり速いな」

距離を瞬く間に離されたことに気が付いたバルバトスは、今持てる全推進力を使い、フラウロスの後を追いかけていく。

「う、これはかなりマズイですよ」

しかし、この状況を見て、グシオンは苦い表情を浮かべながら臯月に言った。

「マズイって、バルバトスがピンチってこと？」

「いえ、ピンチとまでは言いませんが、若干不利です。フラウロスは肩に担いだキャノンによる遠距離からの砲撃が得意なんですけど、そのキャノンがちよつと特殊でして」

「特殊ってどんな感じに？」

「端的に言いますと、あれはレールガンです。なので、飛んでくる弾丸がとにかく速く、放物線を描くことなくほぼ一直線で向かって来るので、発射位置がわかっていても初見で回避するのは非常に困難です」

「うくんそうなんだ。……ねえバルバトス、フラウロスはレールガンを持つてるみたいだから、まだ離れてても気を付けてね」

いまひとつレールガンというものを理解していない臯月だったが、とりあえず念のためにとバルバトスへ忠告を一つ入れた。

「うい、りょうかい」

すると、バルバトスはそれを素直に聞き入れて、少し警戒しながら、進行を再開させる。

しかし、警戒していたバルバトスだったが、反応できなかった。そのレールガンには。

「——食らいな、ギャラクシーキャノン！」

轟音が鳴ったかと思うと、バルバトスのすぐ横を掠めていき、後ろにあったビルへ着弾したのだ。幸運なことにも偶然外れたようだが、何もできなかったのは事実。

「……チツ、俺としたことが、外しちゃったぜ」

「これは凄まじい。弾の軌跡、見えなかった！」

「嘘ッ、速すぎ！」

今の砲撃を見て驚きを隠せないバルバトス（と皐月）だったが、焦ることもなければ、臆することもなかった。バルバトスは、太刀を左手に持ち替え、空いた右手で滑腔砲を構えると、スラストアーを全開に吹かし、フラウロスが立っているビルへ向かって進行していく。

「へえ、今のも見ても向かってくるか。ま、そういうのは個人的に嫌いじゃねえけどよ！」

対するフラウロスも動きを見せ、両肩のキャノン砲に次弾をそれぞれ再装填^{リロード}。

「射程距離、入った」

その間にバルバトスは滑腔砲を当てることのできる距離までには接近できたため、さらに詰め寄りながらトリガーを引き攻撃を始めた。

「チツ、流石にグシオンよりかは速いな。もう当てられる距離まで来るのか。……けど、今度はこっちの番だ！」

避けることが容易な距離にいるにも関わらず、フラウロスは何の抵抗をしないままそれを被弾した。ただ、そのまま黙ったままというわけでもなく、フラウロスはキャノン砲の照準をバルバトスに定める。それからまもなくして、ロックオンが完了されるが、バルバトスは障害物であるビルの陰に隠れ、射線上から姿を消した。

「うまい！それなら、フラウロスのレールガンも当たらないね。……まあ、そうしたらバルバトスからも攻撃できなくなるけど」

皐月は攻撃が当たらないと安心しきった声を出す、それはほんの一瞬だけだった。

「ハッ、無駄無駄！そんなもんまとめてブチ抜いてやる。いつけえ！」

「——ッ！」

バトルが始まってから、今日二度目の轟音が唸るようにして発せられた。2発の弾丸は障害物を穿ち、不快な破碎音を立てていきながら進んでいく。

抵抗物があったことよって弾の行き先が逸れたため、バルバトスに命中することはなかったが、フラウロスは言葉通り、「そんなもん」

と言い捨てたビル一棟を貫通してみせた。

「……威力が、デタラメすぎる」

「あわわっ！あんなのどうやって躲せばいいの？これじゃあバルバトス勝てないよ」

「まあまあ。いったん落ち着いてください、皐月さん。バルバトスには勝算がありますし、確率が高いと思います。なにせ私に勝ったのですから」

大分焦っている皐月とは真逆に、かなり落ち着いているグシオン。まあ、戦っている当事者ではないからこそ、グシオンが焦らないことは当然といえば当然で、皐月については深く感情移入しているからなのだが。

それはさておき、グシオンの予想にはそれなりの根拠があった。

「フラウロスのレールガンですが、あれには弱点もあります。それは、フルパワーで撃つ際、足元を固定しなければならぬということですよ」

「……それってつまり、カメラの三脚みたいなもの？」

「え、えくと、それよりもさらにガチガチに固めてますけど、ブレないためという目的は一緒なのでイメージはそんな感じですよ。そうしなければ、反動で砲身がブレてしまい、あの速度、破壊力、高い命中精度は得られないのです」

「な、なるほど」

そしてさらに補足を加えると、フラウロスは出力を抑えて撃つことも可能であり、その際は脚を固定せずに動きながらも命中精度は十分確保できるが、威力と速度が代わりに落ちる、とのこと。

「つまりは前回の私と戦った時と同様です。皐月さんの奇策を使って接近し、メイスで叩くか太刀で斬る。それが一番ですよ！」

「私の奇策って……まあ、いいや。聞いてバルバトス。グシオンと戦った時みたいに近付いて、近くで勝負しよう。フラウロスは今ならすぐに動けないみたいなの」

グシオンの情報を元に皐月はバルバトスへ提案を飛ばす。

「りょうかい！」

バルバトスはこれもまた、素直に受け答えると、すぐに行動へ移すのだった。

プラモデルを買いに その2

バルバトスはフラウロスへ近付いていきながら、滑腔砲による追撃を重ねていき、彼女のライフゲージを確実に減らしていった。

「全力での砲撃はもう無理そうだし、これ以上食らうのは流石にマズイか！」

流石にフラウロスもこれ以上の被弾は危険だと判断したようで、いままですトツパーの一部としていた腕部アーマーを腕に戻すために変形させ、他のストツパーも地面から外していく。それと並行してフラウロスは、2丁のマシガンで細かい弾丸をばら撒き、接近するバルバトスを迎え撃っていた。

「これで、チエックメイトだ」

それでも、フラウロスの足元が自由になるよりも先にバルバトスは辿り着いた。バルバトスは滑腔砲を背中に戻すと、左手の太刀を頭の上に持つていき、そこから両手持ちにしてフラウロスへ振り下ろしていく。

「グツ、やるな！けどまだまだ、詰みじゃあねえ！」

フラウロスはマシンガンをすぐさま手放し、アサルトナイフを肩から二本それぞれ抜き取ると、頭上でクロスさせ、バルバトスの斬撃を受け止めた。バルバトスの動きを止めている間に、脚部から展開してビルをホールドしていた最後のストツパーを折りたたみ、自身の装甲に収納させる。脚を自由に動かせるようになることを確認すると、受け止めていたバルバトスと太刀を受け流し、彼女に背中を向けた。

「今度こそ、逃がすか！」

バルバトスは左腕のワイヤークローを射出させて、逃がすまいとフラウロスの右脚になんとか絡みつかせると、両足で踏ん張ってスラストターを逆噴射。フラウロスの離脱を許さなかった。

「へえ、よく考えたなバルバトス。……まあその程度じゃ、俺は止められないけどよ！」

しかし、フラウロスのスラストター出力はバルバトスのそれを遥かに上回っていた。フラウロスはバルバトスを引き摺るようにしていく

と、そのままどんどん加速させていく。そしてその勢いを付けたまま
右脚振りぬき、バルバトスをビルに叩きつけた。

「むアツ……い！」

バルバトスのライフゲージは大きく削られていき、加えて大きな隙
が生まれてしまった。その攻める絶好の機会をフラウロスが逃すは
ずも無く、キャノンを怯んでいるバルバトスへ向けて狙いを定めた。

「フルパワーじゃねえが、この距離とあの残りライフなら決められる」
ロックオンが完了し、勝負を決めるために弾を撃ち込もうとする。
しかし、それはできなかった。フラウロスの体は大きく揺れ、バルバ
トスがいるビルの方へと引っ張られているのだ。

「……チクシヨウ、まだ動けたのかよ！それならこのワイヤー切って
おくんだった！」

自分の失態に思わず愚痴を零しながらも、フラウロスは再び脚部と
背面に備わったスラストーに点火させて、これ以上は引っ張られまい
と抵抗を見せた。

「ダアア！」

だが、ビルにメイスを突き刺し、支柱代わりとしていたバルバトス
がビクともするはずがなく、今度は逆にフラウロスが地面へと叩きつ
けられた。

「ガハッッ！」

漸く自分が有利な状況を作れたバルバトスは、突き刺していたメイ
スを引き抜き、下にいるフラウロスへ向かって急降下しながら、大き
く振りかぶった。

フラウロスはフラフラとよろつきながらも起き上がって、手にあつ
たアサルトナイフで防御する構えをとった。

「これで、終わらせる」

「……チツ、これはマズったな」

バルバトスが接近戦に持ち込んでからの展開は早かった。メイス
でフラウロスのガード毎弾き飛ばして懐をガラ空きにすると、そのま
ま連続攻撃を決めてノックアウト。

勝敗は決した。

『Winner、バルバトス』

「ぐぬぬ、一発目のギャラクシーキャノンで決めてればなあ。……なんで、外しちまったんだか」

フィールドから戻ってきて早々、いきなり未練がましいことを口に出していると、グシオンは意味深な笑みを浮かべながら近付いていく。「そんなこと言ってますけど、最初に外したのは絶対にわざとですよ。バルバトスに対してのサービスだったんじゃないですか?」

「え、そうだったの? フラウロス。不良みたいな真似してるのに、意外と優しいところあるんだね」

「は、はあ? そ、そんなわけねえだろ。だいたい、何を根拠にそんなこと……」

「あんな当たらないストレスを掠めるなんて、狙ってやらないと難しい芸当かと思うんですけど」

「そんなのただの偶然。偶然だったの」

「ええ、偶然? 怪しいですね?」

「……こ、この!」

——こういうのツンデレ、って言うんだっけ? フラウロスも可愛いなあ。

グシオンとフラウロスのやりとりを頬を緩め、ニヤつかせながら眺めてみると、時間差でバルバトスがフィールドから戻ってきた。

「フラウロス、ありがとう。一応、参考に、なった」

今にもグシオンに飛び掛かりそうな勢いのフラウロスだったが、状況を一切知らないバルバトスに声を掛けられたことで、気を取り直した。

「……一応ね。ま、いいか、そいつは良かったな、バルバトス。今日は俺の負けだが、またバトルしようぜ。今度は俺が勝つからよ!」

「うい! また、やろう」

「……よし、バトルもこれで終わったし、プラモデルを買いに行こっか」

「そうだな、サツキ」

フラウロスとのバトルがとりあえず終わったので、当初の目的のプ

ラモデルを買いに行くために、皐月は色々な出かける準備を、バルバトスは準備ができる少しの間充電することにした。

そして皐月が準備を終えると、バルバトスは手提げ鞆の中へと入っていき、外出準備が完全に整った。

「それじゃあ、二人とも行ってくるね」

「行ってくる」

「はい、行ってらっしゃい」

「おう、良いもん選んで来いよ」

「ここだね。とうちやく」

「もう着いたのか、速い」

スマホのナビゲーションアプリを頼りに自宅から歩いて約15分ほど、駅前にある模型店へ到着した。ちなみに、模型店というものに今回来ること自体が初めての皐月。少し緊張しているのか、入り口手前で一瞬立ち止まるが、意を決して店内へと入っていった。

「……意外と人、多いね」

「人が、たくさん」

店内へ入って皐月が最初に思ったことは人の多さ。休日ということもあり、普段よりも多く人が集まっていることは間違いないだろう。バルバトスも鞆の隙間から覗きこんで、そのことを確認していた。

「えーと、フレームアームズ・ガールの売り場は……つと」

皐月はFAガールが売っているであろうコーナーを探していくと、それはすぐに見つかった。幸いなことに、こちらのコーナーは他の場所比べて人が少なかったため、バルバトスが悪目立ちすることはなさそうだった。

「ここだね。それでバルバトスは、どういうのがいい？」

「この中だと、よく見えない。顔だけ、出していいか？」

「……ん、うん。こればっかりはしようがないね、いいよ。あと、よさそうなのがあったら教えてよ。私が手に取って近くで見せてあげるから」

「うい。それは、すごく助かる」

許可をもらえたバルバトスは、鞆からひよつこりと顔を出すと、まじまじと商品を眺め、品定めを行っていく。

「……ステイレット、迅雷、マテリア。ふくん、バルバトス達以外にもこんな子達がいるんだ」

皐月は皐月で自宅にいる3人以外にも、FAガールがいることを知り、少し興味を持ったのか、パッケージに書かれた説明文を読んでいた。

そして、皐月とバルバトスがここに来て5分ぐらいが経過した頃、ついにバルバトスが気になるものを見つけたようで、皐月に言った。

「サツキ。上の段にある、『ライフルセット2』？、を取って欲しい」「ん、と、これね。ほいつ」

パッケージの説明書きと絵を確認すると、どうやら種類の異なる遠距離系武器が3つ（手持ち式レールガン、ロングレンジライフル×2、ショットバレルキャノン×2）作れるキットとなっているようだ。

「ふくん、実際にパーツを見ないとわからないけど、作りやすそうかも。バルバトス、どう？」

バルバトスは少しの間、黙々と近くでじっと確認してから、再び皐月に言った。

「サツキ、これにしよう」

「うん、わかった。……他に気になるのはある？」

「むう……いや。ここには、もう無い」

「よし！じゃあ買って帰って、早速作ろっか」

皐月はもういらぬというバルバトスの言葉を聞くと、その一箱だけ持って足取り軽やかに、レジへと向かっていくのだった。

「……………あ、花谷さん、行っちゃった。結局、最後まで話せなかったけど、鞆の中にいたのはFAガールだった、よね？……………けど、意外だなあ。同じクラスに私と同じ趣味を持った子がいた、なんてね」

そして、皐月とバルバトスは気が付いていなかったが、少し離れた場所で水性塗料を見ながら皐月のことを偶然見つけ、一緒にいるバルバトスに気が付いた女の子がいた。

「……………うん、月曜日に声かけてみよう、かな」

その少女はその時、皐月に勇気を出して話しかけることはできなかったが、休み明けに皐月と話してみようと、心に決めるのだった。

「ただいま〜」

「おかえりなさい、二人とも」

「おう、おかえり。……………で、どんなの買ってきたんだ？」

皐月が帰ってくる、余程楽しみだったのか、グシオンとフラウロスは玄関で待っていた。

「え〜とね、銃が3種類入ってるみたい。詳しくは作ってから確認してね」

「はい。皐月さんの手腕に期待して待ってますね！」

「え、ええ〜？変なプレッシャーかけないでよ、グシオン」

「それなら、問題ない。サツキ、とても器用」

「そーいやバルバトスのアーマーも皐月が作ったんだったな。初心者であの出来なら、たしかに安心だろ」

こうして和気藹々とした空気の中、プラモデル作りが開始された。バルバトスの時ほど大それたモノでは無かったため、ものの一時間程度で作業は終わった。

ちなみに、なぜバルバトスがこのキットを選んだのかというと、3人で分配でき、グシオンとフラウロスにも渡せるからという単純明快

な理由だった。

ともだち

「あ、あの、そのバルバトスとかグシオンとかフラウロスとか、私全く聞いたことないF Aガールなんですけど、い、いったいどんな子達なんですか？あ！あとどんな武器を使うとか、どんな装甲パーツを装備してるとか、教えて欲しい、です！」

「ちよーちよつと落ち着いて？ね？寿さん！」

休み明けの月曜日。お昼休み時の学校の体育館裏で皐月は、ある一人の少女にもものすごい勢いで迫られていた。

——この子って、クラスでもおとなしかったはずだよ？こ、こんな性格だったの!?

なぜ、このような状況に陥ったのかというと、その原因(?)は朝。皐月が登校してきたところまで時間が遡る。

「ん、なんだろうこれ？」

皐月は靴箱を開けると、その中に手紙が入っていることに気が付く。封筒には名前が書いておらず、差出人は不明。わかることと言えば、この学校は女子校のため、異性からの手紙——つまり、少なくともラブレターではないということだけだ。

「ま、中身を見てみればわかることだし、いつか」

とりあえず中身を見てから考えようと思った皐月は、そのまま手紙を片手に教室へ歩いていくのだった。

教室へ入り自分の席へ着くと、いつもしているように筆記用具と教科書類を鞆から机に入れた。朝のホームルームが始まるまでまだ時間に余裕があるので、先程の手紙を読もうと封を開け、中にある紙を取り出すと、そのまま目を通していった。

『花谷さんと話したいことがあるので、お昼休みに体育館裏へ来てく

ださい』

文面に書かれている要件は非常にシンプルなもので、単純に話したいというもの。

「伝えたいことがあります」とか、「大切なお話があるので」といったようなニュアンスの言葉は使われていなかったもので、ちよつとあれな展開は無いとわかり、まずは一安心した。

——けど、これだけのことなら、直接言ってくればいいのに。……あ、差出人は他のクラスの恥ずかしがり屋な人で、教室に入りづらいからこうしたのかな？うん、きつとそうだね。

なぜ手紙で呼び出すのかという素朴な疑問を抱いた皐月だったが、自分の中で納得させてこれ以上は無駄に考えないようにした。

「え〜と、私のこと呼び出したのは、あなた……つて、寿さん？」

「……は、はい。そうです」

そして、時間は進んで、昼休みのこと。差出人が指定した場所である体育館裏へ皐月は来てみると、そこでは既にクラスメートの^{コトフキジュンコ}寿盾子が待っていた。自分の予想とは違っていたことと、差出人がまさかの同じクラスの生徒だと知り、少しばかり呆気にとられた皐月であったが、皐月のことを気遣っている余裕も無いほど盾子はテンパっているようで、声を浮つかせながら喋り出した。

「あ、あの、花谷さんって、土曜日に駅前のおー〇スにいません、でしたか？」

「え？……あゝ、あのプラモデル屋さんか。うんいたよ」

言ってしまうと悪いが、一番最初に切り出した話題からあまり女子らしくない。

「ほ、やっぱりそうですよね。それでその時、FAガールを連れてきてました、よね？」

「うえ〜！」

「ひゃアッ!？」

できる限り隠し通して、誰にも気づかれていなかっただろうと思っていた皐月にとって、彼女からのその質問は非常に心臓に悪いものだった。そのため、自身でももう二度と再現できないような変な声をあげて驚いてしまった皐月だが、それはその声に驚いた盾子も同様だった。

できれば隠しておいた方が良いと思っていた皐月だったが、これを誤魔化すことはできない。そのように判断した皐月は正直に答えた。

「……うん。私の部屋にはF Aガール、居るよ」

「や、やっぱり、私の見間違い、じゃなかったんですね。……はあ、でも嬉しいです。私以外にもF Aガールが好きな人が、いたなんて」

「え?じゃあ、寿さんの家にもF Aガールはいるの?」

「は、はい。勿論ですよ。……AS搭載型では無いですけど、ステイレットを持っています。花谷さんの持つてるF Aガールは、AS搭載型なんですよね?」

「……うん、まあそうだけど」

皐月は盾子のその言葉を聞いて疑問符を浮かべる。それもそのはず、皐月はF Aガールは全員ASを持つているものだと、この時点では思っていた。グシオンからF Aガールについての説明を聞いていたものの、その際に市販品のF Aガールとは、彼女達が違うということは一言も話されていなかったからだ。

「やっぱりそうでしたか! F Aガールを持ち歩いている方って、コミュニケーションが普通にできるAS搭載型の子を持つていると思ってたんですよ。うん、すごく羨ましいですっ!」

「そ、そうかな?」

「はい。それはもちろん!」

一番最初こそ、恥ずかしそうにして喋っていたはずの盾子だったが、今となつては皐月が圧倒されるほど明るく嬉しそうに、かつ饒舌に語っていた。

「ところで、花谷さんはそのF Aガールをどうやって手に入れたのですか?」

「どうやってって言われるとなあ……ファクトリーアドバンスからなんかの間違いで届いて、それで偶然私が起動させちゃって、それからかな」

「なるほど。聞けば聞くほど羨ましくなりますね！あ、あと、どの種類の子か聞いてませんでしたね。どの子ですか？」

——寿さんって、FAガールのこと本当に大好きなんだなあ。それに、こんなに人と喋ったの久しぶりかも。

「私のところには、バルバトスとグシオン、あとフラウロスって子が居るよ。知ってると思うけど、みんなすごく可愛いんだ」

皐月は、安堵したことと会話が久しぶりに弾んで嬉しくなったことが相まって、まだ名前を出していなかった3人のことについて話してしまっただ。

しかし、ガンダム・フレームシリーズはまだ市販品として世に出ないことを皐月は知らなかった。

「……えっ、私が聞いたことの無いFAガールが3機も……」

「……あれ、おっい寿さん。どうかしたの？」

一般的に出回っていない、聞いたことのないFAガールを持っている。それは、盾子の好奇心をくすぐった。

「あ、あの、そのバルバトスとかグシオンとかフラウロスとか、私全く聞いたことないFAガールなんですけど、い、いったいどんな子達なんですか？あ！あとどんな武器を使うとか、どんな装甲パーツを装備してるとか、教えて欲しい、です！」

「ちよーちよつと落ち着いて？ね？寿さん！」

そして、この状態に至ったわけである。

それから、一人ずつ丁寧に説明していき、皐月の話のネタもようやく尽きるかといったところで、授業開始10分前の予鈴が鳴り響いた。

「あー、もうこんな時間か。寿さん、早く教室に戻ろっか」

「……あの、その。ご、ごめんなさい、花谷さん……わ、私、すごく

興奮しすぎちゃって。迷惑だった、よね？」

そして、その鈴の音で冷静さを取り戻したのか、ハッと我に返り、少しオドオドしながら臯月に頭を下げる盾子。しかし、臯月は決して怒ってなどいない。首を横に振り、笑顔で言葉を返すだけだった。

「ううん、いいよ別に。私も久しぶりにお喋りできて楽しかったし、そんなこと気にしないで。それよりも、授業に遅れるから急ごう！」

そう言うと、後ろを振り返り盾子の手を引いて一緒に教室へ走って向かっていく。盾子は臯月の後ろをついていきながら訊ねる。

「……あの、またこうやって、私とお話してくれますか？」

「うん。それはもちろんだよ、寿さん。FAガールについて、まだ知らないことがたくさんあるからまた今度、聞かせてよ！」

「……っ。ありがとう、花谷さん！」

——この学校に入学して、始めて友人ができた！

この時の二人は、全く同じことを考え、そして同じように笑みを浮かべていたのだった。

姉（自称）がやってきた その1

「ふう、ただいまー」

「おかえりなさい、サツキ」

学校から帰宅して、いつもと同じように3人へ向けて声をかけるが、返ってきたのはバルバトスの声だけだった。それを不思議に思った皐月は首を傾げながら訊ねる。

「あれ、グシオンとフラウロスは？」

「2人は、今バトルしてる。サツキが作った新しい武器、試してるところだ」

「ああなるほど。そういうことね」

グシオンとフラウロスは、先日皐月が作った武器のお試しということで戦闘を行っていた。2人はそれによって別の空間にいるため、帰宅してきた皐月に反応できなかつたというわけだ。

「サツキ、とても元気。何か良いことあったのか？」

「うん、まあそうだね。今日学校でね、すごい良いことがあったんだ」

「やっぱりそうか！なにがあったのか、ぜひ聞きたい」

「いいよ。夕飯食べながら今日のこと、話してあげるから」

互いに自然な笑みを浮かべ上機嫌のまま、皐月は靴を脱いでリビングへ向かおうとしていると、

——ピンポーン

突然インターホンが鳴った。

「この時間帯に誰かな？……え、まさか3度目なんてことは……」
「む？？」

皐月は何か怪しみながらも玄関の方へ向かい、ドアを開ける。すると、皐月が想像していた通り、怪しげなダンボール箱が——そこにはあった。

「新しいFAガール、か！」

「……アハハ、多分だけど、そうみたいだね」

わくわくしているのか楽しげに声を出すバルバトス。しかし、FAガールが3人からまた増えるのかと思うと、皐月は能天気には喜べるは

ずもなく、乾いた笑いをするしかなかった。

ただ、これでもらえる謝礼金が増えるのならと割り切り、仕方がないと思いつながら、皐月はダンボールを部屋の中へ入れた。部屋に戻ると、二人のバトルはちようど終わっていたようで、皐月が持っているダンボールに早速目が集中する。

「あら、私達以外のF Aガールですか。いったい誰でしょうか？」
「ケツ、バルバトスとのデータを取るだけなら、俺とグシオンだけで十分だつての」

グシオンはそれなりに興味を示し質問を投げかけてくるが、フラウロスはこちらかというとあまり歓迎している雰囲気ではなかった。無論、フラウロスの場合は照れ隠しでそう表では口にはしているのかもしれないが。

「まあまあ。とりあえず開けてみるね」

ダンボールを開けて、その中の小奇麗に梱包されたパッケージを開くと、そこには青いボディスーツを着用し、白髪で長い髪の毛をストレートに下ろしたF Aガールが目を閉じたまま、仰向けになっていた。

「えっ!?あなたは……」

「マジか!?まさか、姐さんがここに来るなんて」

バルバトスは初対面のためか、特に反応を示さなかったが、グシオンとフラウロスは新しく来たF Aガールの顔を見た途端、驚きを隠せないといった反応を見せた。

そして、青いF Aガールは目を開けて起き上がると、辺りを見渡していき状況を整理確認を終える。それから皐月に体を向け、自己紹介を始めた。

「私の名はバエル。ガンダム・フレームシリーズの原点オリジナルとも呼ばれているよ」

いかにもといった偉そうな口調で彼女——バエルは口を開いた。

「久しぶりですね、バエル」

「バエルの姐さん、今までどこで何してたんだ？」

「おお、グシオンにフラウロス!お前たちもここに来ていたのか!」

グシオンとフラウロスの口ぶりから、本当にバエルとは面識が互いにあるらしく、普通に喋っていた。

「グシオンとフラウロスはバエルと知り合いなの？」

「はい、一応そうなります。知り合いと言いますか何と言いますか、ちよつと表現に困るのですが……まあ、先輩後輩のような関係を想像して頂ければよいかと」

「なに、そう恥ずかしがることはないだろう、グシオン。先程紹介したように、ガンダム・フレームシリーズの原点。オリジナルつまりは、私達全員、姉妹同然なのだからな！」

「……えくと、うん。スゴイ個性が強いね。バエルは」

「……皐月さんがそう思う気持ち、とてもわかります。よくもまあ堂々と言えますよね。むしろ私は、姉がこんなのだと思うと本当に恥ずかしくて、堂々と公言したくないのですが」

斜め上に行く発言に引きつった笑いを見せ、若干引き気味の皐月に、グシオンは普段は見せることのない微妙な表情を浮かべながら同調するように頷いた。それからグシオンは、話題を真面目な方面へ切り替えて、確認のために質問を投げかける。

「ところで、あなたもバルバトスと戦うためにここに来た、ということなんですよね？」

「ああ、もちろんそうだと。……しかし、今回はラボでの模擬戦というわけではないことだし折角だ。変則ルールでのバトルを提案させてもらうよ」

「変則ルール、ですか」

「へえ、それは面白そうだな」

「いったい、どんなルールなんだ？」

いままで行ってきたバトルが2回ともスタンダードなルールで行ってきたからか、3人のFAガールは変則ルールという単語に食いついた。すると、バエルは得意げに笑って、バルバトスの質問に答えるのだった。

「バルバトスとグシオン対私、もしくはバルバトスとフラウロス対私だ。どうかな？」

つまり、2対1でのバトルということをやエルは提案してきたわけだ。

「2対1、ということか。だが、なぜ1対1じゃないんだ？」

「それはただなんとなく、という私の気分もあるが、そのような機会はラボでは滅多になかったからね。それに、有益なデータを収集できるだろうから、バルバトスのマスター——キミにとっても悪い話じゃない」

「うーん、私は別に良いよ。バルバトス達がそれでいいのなら」

「私も別にいいぞ」

臆月とバルバトスの二人はバエルの提案をすんなり受け入れた。あとは、グシオンとフラウロスのどちらがバルバトスとタッグを組むかを決めるだけだ。

「さて、どうしましょう？フラウロスも戦いたいですよね？」

グシオンは、当然フラウロスもバトルをしたいものだと考え、話し合おうとしたのだが、フラウロスからは意外な答えが返ってきた。

「いや、今回はパスするぜ。お前がバルバトスのパートナー、やってやれよ」

「……えっ、バトルに積極的じゃないとは、どこか調子でも悪いんですか？あなた本当にフラウロスですか？」

「……ッ！俺は俺だつての！」

「まあまあ、そう怒らないでください。……冗談はさておき、譲ってくれてありがとうございます、フラウロス」

「なんだよ、お前こそ俺に頭を下げるなんて、らしくないんじゃないか？」

「いえ、そんなことはありません。私があなただよりもちよつと大人とちよつとした漫才にも似たやり取りが繰り広げられたが、揉めることとなく決まった」

セツシヨンベースは、グシオンとフラウロスがついさつきまで使っていたため、既に2つはセット済みであった。バエルとグシオンはそこへ装甲パーツをセットしていき、バルバトスはもう一つのセツシヨ

ンベースを装甲パーツと共に柵から引つ張り出してきた。

「もう一つ追加ルールとして、キミ達の初期ライフゲージの合計値が私のライフゲージ、ということでもいいかな？」

「あなたにとつては初めから不利な条件でしたし、それくらいの追加ルールは構いませんよ」

「グシオンはこう言っているが、バルバトスはどうだい？」

準備が丁度終わったバルバトスにもバエルは同じく訊ねると、バルバトス同意の意思を示して、首を縦に振った。

「よし、では始めるとしよう」

「バエル」

「バルバトス」

「グシオン」

「二・フレイムアームズ・ガール、セッション！」

「さあ、行こうか」

「行くよ」

「行きますー！」

また、今回は2対1の変則ルールだが、選ばれたフィールドは、前回や前々回で使用した場所に比べると面積が狭く、バトルのためだけに作られたといったような非常にシンプルな空間だった。

「久しぶりのバトルだが、どこも錆びついてはいないみたいだ」

青と白がメインカラーの装甲を身に纏っているバエル。武装は腰の提げた二本の黄金色の剣と、背中にある二枚の大型スラスタースタールウイングに併設された細長いレールガンのもみ。それと、流線型でスリムなフォルムであることから察するに、瞬発力と運動性能は抜群に良いと見て良い。おそらくは、バルバトスと同タイプの近接格闘での戦闘を得意としているのだろう。

「さあバルバトス、グシオン。先手はキミ達に譲つてあげよう」

彼女は姉の余裕だと言わんばかりに、二本の剣を抜刀して挑発のようにクルクルと手で弄んでから、ピタッと動きを完全に止めた。

「ならば、こちらから、行くー！」

「バ、バルバトス!?!ちよつと止まってくださいー！」

フラウロス戦と同じ装備で出撃したバルバトスは、グシオンの制止の声を無視して、太刀を構えたまま一直線で進行。バエルにぶつかる手前で跳び上がると、頭上から太刀を振り下ろしていった。

「ハアッ！」

「力強く、実に良い太刀筋だ。……だが、あまりにも正直すぎる」

バエルはその正直な攻撃を左手の剣で受けると、それを無理に押し返そうとはせず横へとスライドして躲す。

「初手はたしかに譲ったよ。では、今度はこちらの番だ！」

そこからバエルは、二本の剣でバルバトスを攻め立てていった。バルバトスは身体をよじって躲そうとするが、流石に連撃の返し技を完全回避することは叶わず、軽いダメージを受けた。

「……バエル、強い」

「もう！ 数的にこちらが有利なのは明白なんですから、もう少し作戦を練ってから行きましょう！」

「むい。すまない、グシオン。じゃあ、私はどうすればいいんだ？」

「そう……ですね。私が遠くから援護しますので、バルバトスは私のことを気にせず、接近して戦ってください」

「わかった。言われなくとも、そうするつもりだったし、後ろは任せるぞ」

「ええ、任せてください！」

グシオンの指示を聞くと、バルバトスはまたバエルへ一直線に向かっていき、今度は下から斜め上へと斬り上げていく。バエルはその斬撃もまた凌ぐが、バルバトスの攻撃はまだ終わらない。空いた別の部位を狙って次々払い、斬り、突いていった。

「おっと！」

想定していたよりも速度があつたのか、バエルは脚部のスラストを吹いて後ろに後退した。

「これはすごい。長い得物をここまで速く振り回すとは。大した妹だ」

「……？ 私、バエルの妹、じゃない」

「フン、照れてるのかい？ グシオンのことを真似る必要はないんだ」

よ?」

「別に。そういうつもりも、ない」

意表を突かれようとも、余裕を一切崩さないバエルは再び相手の気に障るようなことを口にするが、それにバルバトスは大きく動じることは無かった。ただ、バツサリとバエルの言葉を切り捨て、そして攻撃を仕掛けていくだけだった。

姉（自称）がやってきた その2

「ハアアッー！」

バルバトスは握っていた武器を太刀からメイスに持ち替えて、重く鋭い攻撃をバエルに加えていく。

しかし、これもまたバエルへの有効打になることはなく全て受け流され、代わりにバエルの軽やかな斬撃によって、バルバトスの耐久値は少しずつ削られていった。

グシオンは二人の密着した攻防が繰り広げられている間に、バエルの死角へ回り込むと、4丁のライフルによる一斉射撃を放っていた。

「バルバトスに夢中になりすぎて、私のこと忘れてたんじゃありませんか？」

グシオンの奇襲を躲しきることは不可能だったようで、バエルにもようやくダメージが入った。

「……忘れてなどいないさグシオン。キミは賢い子だからね、常に狙っているものだと思うんだよ」

それでもいくら弾丸を叩き落として、バエルは最小限の損傷で済ませていた。

「クツ、相変わらず、デタラメな反応速度ですねっ！」

「フフン、それは褒め言葉として受け取っておこう。そしてこれは、そのお返しだ！」

グシオンの姿をハッキリと捉えたバエルは、両翼の先をバエルへ向け、レールガンを2発撃ち放つ。放たれた2発の弾丸は、グシオンの両肩部にそれぞれ直撃し、軽い爆発が生じた。

「きやあっー！」

「グシオン、大丈夫か？」

「これくらい、どうということはありません。私の装甲はそう簡単に抜かれませんか。それよりも、あなたは目の前のバエルに集中してください！」

バルバトスの注意が僅かに逸れていた間に、今度はバエルの方から

バルバトスへ接近し、連続攻撃を仕掛けてくる。バルバトスは、再び武器をスイツチさせて、なんとかバエルの素早い動きに対応させようと太刀を構えると、斬撃をスレスレで受けていった。

「……ッ！」

「やるね、私の動きにこうもうまく対応できるか。……けれど、それはいつまで続くかな？」

しかし、ギリギリの攻防はそう長くも続くはずもなく、バエルの動きに段々と追いついて来れなくなり、とうとう少しずつ攻撃がバルバトスの装甲に掠り始めた。

グシオンはその状況が芳しくないと判断して、ライフルを連射しながら背後から近付こうとするが、バエルはそれを振り向くことなく背中の中のレールガンで迎撃。

「……クツ、このっ！」

回避することはかなわずに数発被弾するが、グシオンの足が止まることはなかった。それに構うことなく進行し、そのままライフルを撃ち続けた。

すると、いままでほぼ無傷の状態だったバエルにクリーンヒットして、ライフゲージがついに目に見えるレベルで減っていき、バエルも驚いたような声を出した。

「……ッ！まさかノーガードで突っ込んで来るとは！」

「いつまでも守りに徹してたら負けますからね！多少のリスクは覚悟の上ですっ！」

そしてグシオンの攻撃がまともに入ったことで、バエルの攻めの手がほんの一瞬止まり、体勢は崩れる。バルバトスにも攻撃のチャンスが訪れた。

「バルバトス、今です！」

「うい！」

バルバトスは太刀を大きく振りかぶり、斜め下に向けて斬り下ろしていく。バエルは悪い体勢でありながらも、片方の剣でなんとか受け止めようと腕を動かした。しかし、得物の質量差や体勢の良し悪し、二人の位置関係など、今この瞬間の状況においてのみ鑑みれば、どれ

を取ってもバルバトスが有利なことに変わりは無かった。

「リアア！」

バルバトスの太刀は一瞬だけバエルの剣に止められたが、それはほんの僅かな間だけ。バルバトスはその剣ごと力任せに押し切ると、二撃目も間を置くことなく叩き込んで、バエルに大きな痛手を負わせることに成功した。

「……油断したつもりは無かったのだが、判断を誤ってしまったか。だが、私の方こそキミ達に負けるつもりなど毛頭ないさ！」

大きく後ろへ吹き飛ばされたバエルであったが、すぐさま復帰する。そして、勢いよく両翼からジェットを噴出させながら、上空へ飛び上がったかと思えば、そこからすぐに急降下。

「いいえ、勝つのは私達です！」

「絶対、負けない！」

グシオンはまたしてもライフルを空へ向けて撃ち放っていき、バルバトスはそれに合わせるようにして滑腔砲の引き金を引いた。

対してバエルは、降下するスピードを緩めるともなく、むしろ加速させながら二人の弾幕を回避する。そして、その速度を保ったまま間合いに入るとバルバトスへ剣先を向け、突撃していくのだった。

「……むアッ！」

バエルの突きをまともに食らったバルバトスは、大きく後ろへ飛ばされた。それと同時に、いままで蓄積していたダメージ重なったことで、バルバトスの耐久値がいに危険域へ達してしまった。

「こうなったら作戦変更です。あなたは一旦下がってください。今度は私が前衛を引き受けます」

「……りようかい、だ」

前衛と後衛をスイッチさせると、グシオンは1本のハルバードと2つの拳を振り回して牽制。バルバトスと代わり今度はグシオンがバエルと正面から相対する形となった。

「今度は、私が相手です！」

「近接戦闘が不得手なキミが、か。それは判断ミスだと思うが、仲間を思いやる気持ちは悪くないかな」

「……いつまでも舐めないでください。昔の私とは違いますから!」

戦闘の展開が瞬く内に変わっていく中、観戦している二人はというと、少し渋い表情をしながら三人のFAガールを見つめていた。

「……ハア、これは良くない展開だな」

「……たしかに、これは二人のピンチだね。ねえフラウロス、一発逆転できそうな作戦とかってないかな?」

「おいおい。それはいくらなんでもムチャ振りすぎるだろ。どっちか片方が沈めば、ほぼ負け確な状況で、近接戦闘が得意なバルバトスのライフゲージがレッドゾーンに達しちまった。これだとバルバトスの戦闘能力が半減したに等しい上に、あの滑腔砲じゃあ、戦況をひっくり返すのに火力が足りないな」

フラウロスは二人のことを皐月と同様に、鼻眞目で観戦していた。ただ、その鼻眞目で観ても、戦況はバエルの方へと傾いているように写っており、居ても立ってもいられない、そんな心境の二人だった。そんな中、皐月はふとあることを思い出して、曇っていた表情を明るくさせた。

「あ、そうだー!それなら、私が作ったこれでなんとかかなるかな?」

あまりにも唐突すぎる皐月の提案にフラウロスは、一瞬フリーズしてから反発的な意見を返した。

「……は?嘘だろ?バルバトス本人が試しても無い武器をぶっつけ本番で使わせるってのかよ!」

「え〜?けど、フラウロス達だつて私が作った武器を使って、特に問題は無かったんでしょ?」

「たしかに……それは、そうなんだが」

「うん、じゃあ大丈夫。それにただ見てるだけじゃ、どうにもならないなら、試してみる方がよっぽどマシだよ」

皐月はそう言うと、すぐに行動へ移した。バルバトスのウエポンラックにレールガンをセット。それから、スマホのアプリ上で新しく表示された武器をバルバトスの方へとスワイプさせた。

「バルバトス。新しい武器、今そっちに送ったから受け取って」

「……皐月が作ったあの武器か、わかった!」

レールガンはバルバトスのほぼ真上に姿を現すと、そのまま直下へ落下し、バルバトスはそれを見事にキャッチした。

そのレールガンの使い方は、バルバトスが持っている滑腔砲と同様、単純にトリガーを引けばいいだけなのだが、少し変わった運用方法もある。それはフラウロスもよく使う手法——電力をチャージして、出力を高めることができるということだ。

「完璧な仕上がり、流石サツキだ。これならフルチャージすれば、バエルにも当てられる……はずだ」

「バルバトス、そのチャージにはどれくらい掛かりそうですか?」

「あと30秒あれば、撃てる」

「30秒ですね?了解です!」

バルバトスは銃口をバエルに向けると、すぐに電力のチャージに取り掛かり、グシオンは発射までの時間を確認する。

「あの兵器は……そう簡単に撃たせるものか!」

「させるものですか。絶対に、ここは通しません!」

バエルはレールガンの威力を知っているゆえ、バルバトスを優先して落とそうとするが、グシオンは前に立ち塞がり、その行く手を阻んだ。

「……ほう、ならば」

バルバトスに接近することが困難となったバエルは、すぐに思考を切り替えて二門のレールガンを真下に向けて砲撃。それからグシオンのことを斬り払って牽制し、ある程度の距離を取ると、上へ大きく飛び上がる。

「……まだです!」

しかし、バエルの砲門が火を噴くことはなかった。グシオンが持っていたハルバード投げ飛ばして、体勢を崩したからである。

砲撃を阻止したグシオンはバエルに近付くと、両サブアームでバエルの両翼を捕縛し、そのまま握る力を強めていく。

「今の内に、チャージを、早く!」

「……クッ!なら、先にグシオンを」

拘束されたバエルはやむなく剣をその場で振り抜いて、攻撃を加えていく。ただ、グシオンもやられっぱなしというわけではない。空いた両拳にナックルガードを装着すると、ほぼノーガードで殴り始めた。

「チャージ完了。グシオン、避ける！」

そして、二人が斬り合い殴り合いをしている内に、バルバトスのレールガンの発射準備が整った。グシオンは真下へ急降下して、さすがバルバトスはトリガーを引く。

「……ハハッ、見事なコンビネーションだ。私の完敗だな」

超高速で放たれた弾丸は、バエルに回避の暇を与えずに身体を確実に捉えて直撃。ライフゲージを一気にゼロまで削っていくのだった。

『Winner、バルバトス、グシオン』

「グシオン。そっちは大丈夫、か？」

先程まで激しい接近戦を繰り返していたグシオンの方へバルバトスは歩み寄り、手を差し伸べる。するとグシオンは、ボロボロな状態の体を起こして、差し出された手を掴んだ。

「これくらい大丈夫です、と言いたいところですが、かなりギリギリでしたね。まあ、それはあなただっただって同じだと思えますけど」

「たしかに。すごく疲れた、な」

二人は全力で戦い満身創痍となりながらも、バエルから勝ち星を上げられたのであった。

アスタロト推参 その1

つい先日、バルバトスやグシオンと激しい戦闘を行ったバエルだったが、彼女もまたグシオンやフラウロスと同じように、皐月の部屋にしばらく滞在することになっていた。そして今、彼女は何をしているかというところ……

「なあ姐さん、もう少し手加減してくれよ！」

「それはできない相談だ。私がラボに居た時よりも、フラウロスは大分強くなっているみたいだからね。そんなことをすれば、こちらがやられてしまうよ」

「……こっちからすれば、姐さんは相も変わらず化物じみてるってのに」

フラウロスとバトルを行っていた。

「グシオン、バエルはなぜあんなに強いんだ？」

そしてバルバトスはバルバトスで、バエルの強さに疑問を抱き、グシオンに訊ねるが、彼女は肩を竦める仕草をしながら返答するだけだった。

「なぜと言われましても、私にもその謎はよくわかりません。……ですが、『初号機は強いと相場が決まっている』とか、バエル自身が以前そのようなことを言っていた気がします」

「む、そういうものなのか。しかし、ものしりのグシオンでもわからないとは、残念」

『Winner、バエル』

「チクショウ、また負けた！」

「これで対戦戦績は18勝2敗。うん、今回も良い勝負だったよ、フラウロス」

そして、外野の二人がそうこう話している内に決着は着いたようで、ピンクの機体と白色の機体がセクションベース上と戻ってきた。

——ピンポーン

さらに、この部屋の状況を見ていたのかと言わんばかりの絶妙なタイミングで、最近では聞き慣れたインターホンがこの部屋に鳴り響

く。

「また新しいFAガール、か？」

バルバトスがここへ来て、この展開は3度目のこと。「二度あることは三度ある」ということわざを知っているわけではないのだろうが、ここを訪ねる者はFAガールだろう、と。バルバトスの頭の中では、既にそのようにインプットされているのだろう。

「そう勝手に決めつけんなって。皐月にもダチはいるだろうし……つてまだ学校にいるわけだから、んなことはないか。まあ、他の荷物かもしれないねえだろ」

「そうですよ、フラウロスの言うことももつともです。とりあえず、カメラを覗いてみましょうか」

すると、フラウロスは珍しく冷静に反論して、グシオンはその言葉に領きながらインターホンの画面に目を移した。ところが、その画面に写っている人や物は無く、背後に広がっている青空と遠くに見える高層ビルが写り込んでいただけ。

「あれ、おかしいですね？たしかにインターホンが鳴ったはずですけど……」

「それじゃあ、あれか。悪ガキのいたずらとか？」

そのようないたずらをする子供が今時いるのか？という疑問が湧いてくるが、そもそも夏休みでもないこの時期の午前中。子供が歩くこと自体あり得ない話だ。

「ま、この家の主である皐月がいないわけだ。変に対応する必要もないのでは？」

「たしかに、それもそうか。帰ってきてからサツキに報告しよう」

「ええ、そうするのが一番ですね。……それではバエル。今度は私とバトルをしましょう。別に構いませんよね？」

「フフ、いいだろう。私でよろしければ、相手になろうじやないか」

バエルの言うことも尤もだったため、4機のFAガールは特に気にすることなく、それぞれのしたいように行動するのだった。

皐月がいつもとほぼ同じ時刻に学校から帰路についていると、玄関の前に見知らぬ小さい何かが置いてある。その小さい何かをゆつくり近づきながら覗き込むと、装備している装甲が左右非対称といった容姿の初めて見るFAガールだった。しかもそのFAガールは正座で完全に静止した状態でいたのだ。皐月はその様子に戸惑いながらも、微動だにしない彼女に声を掛ける。

「……えくと、あなたはバルバトスのお客さんってことでいいのかな？」

声を掛けられたFAガールは振り向いて数秒間考えてから、ハツとした顔になり口を開いた。

「……なるほど。バルバトスの主どののは、いままで外出していたのですか。どおりで、インターホンを鳴らしても出ないわけです」

「あくそつか、そういうことだったのね。うんわかった、とりあえず入ってきていいよ」

「これはこれは丁寧に。それでは、お言葉に甘えてお邪魔します」

今のやりとりだけでなんとなく状況を理解した皐月は、部屋の前にいた彼女を自分の左手に乗せて、中へ入っていった。

リビングに行くと、早速バルバトス達——FAガール4機の視線は皐月の左手に集中する。それぞれが多種多様な反応を示していると、視線を気にしてなのか、左右非対称のFAガールは、皐月の左手から飛び降りてフローリングの上きれいに着地。それからバルバトス達の方を向いて喋り出した。

「すみません紹介がまだでしたね。私はアスタロト。本日はバルバトスとの一対一での試合を所望するために、訪ねた次第です」

アスタロトと名乗ったFAガールは彼女たちに綺麗なお辞儀をして、今度は皐月の方に体を向けた。

「どうでしょうか？バルバトスの主どの」
「ん、バルバトスがやりたいのなら、私は別にいいよ。私着替えてくるから、その間に準備しといて」

そう言い残して、皐月はリビングを出ていった。残されたバルバトスは、表情を特に変えないままアスタロトの方へ顔を向けて頷く。

「アスタロト。その勝負、受けて立つ」

「やる気十分で何よりです。でしたら、早速試合といきましょうか!」

「それで、どうするか……って準備するの早すぎでしょー!」

皐月が部屋着に着替えて、リビングに戻るとスタンバイが既に完了していた。

「いつでも始められるぞ、サツキ」

「……はいはい、そう焦らなくても大丈夫だって」

急かすバルバトスを宥めながら、皐月は慣れた手つきでスマホを操作していく。

「皐月さんが操作する手も早くなってきましたね」

「ん〜そうかな? まあ、こんな短期間に立て続けにやつてればね、そりゃあ早くもなるって。……よし、準備できたよ、二人とも」

その言葉にセッションベース上の2機は頷き、それから前を見据える。

「バルバトス」

「アスタロト」

「フレームアームズ・ガール、セッション!」

「いくよ」

「いざ、参ります」

転送された空間は、前回バエルと戦った場所と同じくらいの高さしかない、闘技場を模したようなフィールド。2機のFAガールはほぼ同じタイミングで着地した。

「ねえ、ところで3人はあの子のこと知ってるの?」

「ええ、バエルはもちろん知ってるでしょうし、私とフラウロスもあまり話したことはありませんが、何回か戦っていますからね、当然知っています」

「バルバトス以外みんな顔見知りなんだ。じゃあ、どんな子なの?」

「彼女はバエルやバルバトスと同じで、近接戦に特化したガンダム・フレームです。まあ、どちらかといえば、スピードよりも力で押してい

く戦闘スタイルに近いので、二人とは多少異なっています。……しかし、前に会った時よりも装備が増えていますし、姿も若干変わっていますね。私達のデータをあてにしない方がよさそうです」

「ん？そっか、バルバトスに似たタイプか」

グシオンが説明したように、彼女の背中には形状の異なる巨大な剣が2本マウントされていて、それらが主兵装であることは容易に推測できた。その特徴的な大型武装の他にも、右腰に専用ライフル、左腰に2本のナイフを提げ、左腕には青いシールドのようなサブナックルを装備している。

「尋常に勝負です、バルバトス！」

アスタロトは大剣を1本背中から取り出して両手で握ると、バルバトスとの距離を縮めていった。

「望むところ、だ」

対するバルバトスは太刀を構えて、アスタロトと同じように脚部のスラストを吹かしていく。双方同じように距離を無くしていき、先制したのは左右非対称の機体——アスタロトだった。彼女の持つ剣——デモリツションナイフは折り畳み式の大剣であり、それを攻撃する寸前で急に伸ばしたのだ。

「……武器が、伸びた！」

意表を突かれたバルバトスだったが、アスタロトの斬撃を直撃する寸前でなんとか受け止め、一旦攻撃の届かないところまで下がる。

「私の初手を初見で防ぐとは、なかなかやりますね。これは良い試合になりそうです！」

フアーストアタックを躲されたアスタロトだったが、嬉々とした声を発し笑みを浮かべる。一方のバルバトスはさてどうするかと思考を巡らせて作戦を画策しようとするが、経験が豊富な他の3機のように的確な具体策は浮かばない。

「……むい、やっぱりわかんないな。けど、守っていたらどうにもならないし、攻めるしかない、か！」

とりあえず、考えるよりも動くことにしたバルバトス。策は特に無かったものの、アスタロトとの距離を一定に保ちつつ滑腔砲による砲

撃を浴びせていった。

「意外と堅実ですね。で、あれば私も！」

アスタロトはその砲弾を左腕のサブナツクルでやりすぎしながら、右手でライフルをとり、反撃を与えていく。しかし、それらの遠距離装備では、互いに決定打を欠き、戦況は膠着した状態になるうとしていた。

「やはりこのままだとどうにもなりませんね。……こうなれば、新しい武器を試してみましよう」

アスタロトは背中にあるもう一本の大剣——バスタードチョツパーを左手で取る。

「二刀流……？」

バルバトスは首を傾げるような仕草をするが、アスタロトは「フフン」と得意げな笑いを見せた。

「そういう使い方もありますが、こう使うのです！」

バスタードチョツパーとデモリッションナイフを背中合わせにして連結。二本の大剣をより巨大で重量のある一本の武器とすると、目をギラリと光らせて再びバルバトスの方へと立ち向かっていくのだった。

アスタロト推参 その2

皐月とグシオン、フラウロス、バエルは大きな戦況の動きが無かったせいかな、ここまで言葉をあまり発することなくバトルを観戦していたが、

「うわ、これで弱点らしい弱点が無くなったじゃねえかよ……」

合体させた大剣を目の当たりにして、フラウロスは忌々しそうに呟いた。

「え、今までのアスタロトには何か弱点ってあったの？」

「まあ弱点というよりは、ただ単純にバルバトスが戦いやすくなるっただけの話なんだが」

「……ん〜？どういうこと？」

「皐月さん、あの折り畳み式の大剣のことをフラウロスは言っているんだと思います」

さっぱりわからない、とでも言いたげな皐月に、グシオンはすかさずフォローを入れる。

「あの大剣——デモリツションナイフは使いたい時だけリーチを伸ばせるので、さきほど仕掛けたような奇襲に使うこともできますが、その反面、継ぎ目だけはどうしても他の部位に比べて構造上脆く、弱くなってしまうのです」

「はあ、なるほどね。けど、今はその継ぎ目をカバーするように合体しているから、バルバトスとアスタロトのリーチの差はどうあっても覆らないと、………ってそれバルバトス大ピンチじゃん！」

グシオンの解説を首を縦に振りながら聞き流していた皐月だったが、状況を把握した途端みるみるうちに顔を青くさせてハラハラと焦りの色を見せだした。

「ああ、そうなるね。フィールドがもう少し広ければ、私と戦った時のようにレールガンを使えただろうが、この状況ではチャージ時間を稼ぐことも至難の業。バルバトスの地力が試される正に正念場だな」

「正念場、か。……けど私は勝つことを信じてるから。だから絶対諦めないで、バルバトス！」

三人のF Aガールから不安を煽る言葉を投げかけられたが、皐月はまだ信じて疑わなかった。バルバトスならきつと勝てる。

「では、再び参りますよ！」

バルバトスは太刀よりも重量のあるメイスに持ち替え、応戦する構えを取るが、得物の質量差はそれでもなお圧倒的なものだった。アスタロトの大剣は、行く手を阻むメイスをバルバトスの身体ごと豪快に跳ね飛ばしていき、そのまま前進していく。

バルバトスはデモリッションナイフの継ぎ目が弱点であるということ推測していたため、重点的に叩きつけるのだが、ビクともしない。

「重い！ 拗ききれない！」

そして、アスタロトはそのまま攻勢を強めていき、バルバトスのことをフィールドの壁面へと叩きつけた。ついにアスタロトの方が先にチエツクをかけた。

「……ううっ！」

「斬り捨て、御免ッ！」

全身を打ちつけられ、まだ怯んでいるバルバトスに対し、アスタロトは大剣を頭上に持っていくと、そのまま質量に身を任せて斬りかかっていく。

「まだ、まだ！」

逃げ場がなくなったバルバトスだったが、頭を振る素振りを見せてから、彼女はそこで一か八の賭けに出る。メイスをアスタロト目掛けて突き出し、パイルバンカーを射出させたのだ。

「ラアアアッ」

「なんと！」

逃げるでも守るでもなく、攻めに転じたバルバトスのその行動は、アスタロトを驚かせるには十分なものだった。バルバトスの起死回生の一手は、アスタロトの中心から僅かに逸れたものの右手に食らい

つく。アスタロトの渾身の一打は、バルバトスの攻撃によって僅かに狙いが逸れ、クリティカルヒットとはいかなかった。

「……本当に大したものです。あの状況で打つてくるとは思ってもみませんでした」

「……むい、危なかった。……けど、これは、大分マズイ、な」

とはいえ、ダメージのレベルで言えば、バルバトスが圧倒的不利であることに変わりはない。目の色もやや混濁しているようにも見え、どんなに軽い攻撃であろうと食らえば戦闘不能となるリスクが高いのもまた事実。

「ですが、私が優勢であることには何ら変わりありません。このまま押し切らせていただきます！」

「……ぬう」

フラフラとおぼついた足取りで、立っているのもやつとも見てとれるバルバトスに、アスタロトはここが勝負分かれ目であると言わんばかりに攻撃の体勢に入った。

「ねえ！しっかりと！バルバトスつてば！」

皐月はスマホに向かって、バルバトスへ叫ぶように声をかける。すると、バルバトスの消えかけていた闘志が息を吹き返し、力強い眼光が再び灯った。

アスタロトの大剣をバルバトスは、メイスで受け止めようと上へ持ち上げるが、それは意味の無いものとなった。——なぜなら、アスタロトの大剣が持ち上がることは無く、攻撃が不発に終わったからだ。

「右腕が動かない！……まさか、さっきの攻撃でやられた？」

まさかの緊急事態に狼狽えるアスタロト。来るはずの攻撃が来なかったことで、首を傾げながらもすかさず距離を取るバルバトス。

そして、その様子を見ていた皐月もいったい何が起こったのかと、疑問符を浮かべた。

「……え？どういうこと？」

「これは憶測にすぎないが、先程のバルバトスが捨て身で放ったあの

一撃、アスタロトの右腕に深刻なダメージを与えたのだろう。それによつてあの太刀を持ち上げることが不可能となり、あのような結果を生んだ」

「ハッ、つまりあそこでのバルバトスの判断は間違つていなかったつてことだ。やるじゃねえか」

「そつか、つまり今がチャンスつてことだね。バルバトス、頑張れ！」

「クッ、こうなつてしまつた以上、やむをえませんね」

アスタロトは武器の使用が困難となつたことを悟り、デモリツションナイフとバスタードチョツパーの結合を解除させて、バスタードチョツパーだけを地面に捨て去る。そして再び、デモリツションナイフ一本のみを取り構える。ただし、今のアスタロトの右腕には支える力など無く、ただ添えているだけに等しい。先程までのような重い攻撃は打てない状態となつたことで、バルバトスにも僅かに勝機が見え始めた。

「絶対、負けない！ サツキが諦めないなら、私も諦めない！」

バルバトスはパイルバンカーが突き出た状態のメイスを、槍投げの要領で豪快に投げ飛ばした。バルバトスの手元から離れたメイスは、ジャイロ回転をしながらぐんぐんと飛距離を伸ばしていく。

——今の右腕の状態では、いつものパワーが出ない。なら！

叩き落とす、という選択肢が既に失われていたアスタロトは一旦デモリツションナイフを折りたたませて受け止める姿勢に入った。投げられたメイスは、そのままデモリツションナイフと激しい金属音をたててぶつかり合い、圧していきながらも、勢いを徐々に減衰させて地に落ちていった。

「これで終わり……では無いのでしょうか？」

しかし、バルバトスの攻撃がそれだけのはずなどない。アスタロトが身を固めて防御していた隙に、バルバトスは背中にマウントしていた太刀を抜き、一足飛びで最接近。自身の間合い一歩手前まで接近していた。——ただ、あくまでも一歩手前までであるため、勝負がどち

らに転ぶかはまだわからない。

「ですが、一歩足りませんでしたね！」

アスタロトはデモリツションナイフを再び展開させると、おもいきり薙ぎ払う。

「ハアアアッ！」

バルバトスは太刀を両手で強く握りしめ、それを縦一直線に振り下ろす。

二人の攻撃はほぼ同時に放たれて交錯した。それから互いに振り返ることなく、背を向けたまま静止する。

「……ッ。どっちが、勝ったの？」

「俺には、アスタロトのが先に届いたように見えただよ」

「……いえ、バルバトスの方が早かったかと」

「……さて、勝負の女神はどちらに微笑むか」

静観していた皐月たちは、固唾を飲んで勝敗のアナウンスが流れるのをじっと待つ。そして、2, 3秒のラグの後、いつものように勝敗を知らせるアナウンスが流れてきた。

『Winner、バルバトス』

そのアナウンスが鳴った直後、いままでの緊張の糸が切れたのか、いままで戦っていた二人は、ほぼ同時に後ろへ倒れ込んだ。それから、アスタロトは称賛の言葉を対戦相手に送った。

「バルバトス、あなたの最後の一闪、お見事です。感服しました」

「アスタロト、とても強かった。……だから、とても疲れた。眠い」

バルバトスもアスタロトのそれに同じニュアンスで返すのだが、瞼を閉じてすぐさま寝る態勢に入ろうとしていた。

「えっ、ちよっ。寝るのなら充電くんの上で寝てください」

「……ZZZZ」

「まったく、オンオフの差が激しいですね、バルバトスは。ついさつきまでとは別人のようです」

しかし、その言葉が耳に入る前にバルバトスは夢の中へと旅立ってしまったようで、呆れるしかないアスタロトだった。